

獨步小品

TUFTS UNIVERSITY LIBRARIES



3 9090 014 794 065

獨步
小品

余は曾て其如何なる場合に於いても不
眞面目不謹慎の著作を爲せし事なし。こ
れ余の有せる總ゆる過去のの中に於いて
最も矜ある過去也。余はこの過去を傷け
ざらんが爲には、如何なる犠牲をも惜し
む事なかる可し。……………一獨歩

目次

目次

沙漠の雨	一
彼	四
落日に對す	一五
鎌倉の裏山	一七
新らしき年來れ	二七
晝	三三
驟雨	四七
無窮の生命	五七

目 次

戀の日記	六八
孤立の悲惨	九〇
わが過去	九三
趣味について	九六
青桐	一〇〇
憐れなる兒	一〇一
吾が土曜日の夜	一一二
我が過去	一一三
潔の半生	一三五
天地の秘密	一七二

目次

青年少壯の時代……………	一七四
信仰と肉情……………	一七六
唯皮相のみ……………	一八二
信仰……………	一八四
氣附く事……………	一八六
無題録……………	一八八
悪魔……………	一九二
死は滅なるか……………	一九八
アライド……………	一九九
人生の奥妙……………	二〇四

獨 步 小 品

沙 漠 の 雨

駱駝あり、東の國より歸り來りぬ。沙漠に住める駱駝之れを迎へて、其群團に入れ、東方の奇事を問ふ。歸り來りし駱駝答へて曰く、

「東の國は草木繁り、人多く住み、此地の如く淋しからず、且つ不思議なるは雨といふものあり。」

『雨とは如何なるものぞ。』

『雨とは天より落つる水なり。此水の落つるに先つて雲といふもの現はる。』

『雲とは如何なるものぞ。』

『あゝ雲か、雲か、口にて言ひ表はし難きものを雲といふ。』

群團の駱駝、起つあり、伏するあり、一齊に曰ふ、是非其雲なる者、雨なる者を見たし、之れを我等の神に祈らんと。

茲に於て彼等は月の出づるを待ちぬ、月は彼等の神として崇め拜するものなり。東の空より月出でぬ。皎々として白沙萬里、さながら光の海に似たり。老いたる駱駝祈りて曰く、

『我等が尊み奉る美はしき神よ。願くは雲なるもの、雨なるものを示し給へ。』

雲悠悠と涌き出でぬ、雨蕭々と降り出でぬ。千里萬里、際限なき沙漠に、風なくして蕭々と降りしきる雨の光景の如何に寂寞たるよ。嗚呼如何に淋しくも亦た悲しげなる光景よ。

雨は三晝三夜、降りつきぬ。長天濛々、日の光を見ず月の光を見ず。初めがほごは駱駝の群團も物珍らしく眺め居りしが、遂に畏れ惑ひ、聲を擧げて叫び出でぬ。

『神よ、光の神よ、雨なるもの雲なるものを收め給へ、我等をして永久に光の國に住しめ給へ！』

彼

一

二人は相ならびて歩みぬ。しばらく言葉なかりき。彼は心に激
するところありけん、肩に擔ひし杖をはずして強く地をうちたり。
しかも打ちし彼はこれを知らざりき、傍に歩みし男は杖の音をき
きて竊にうなづきぬ、心に思ひ當る節やありし。

二

口にくはへし葉巻を右の手にうつして、何ごゝろなく窓より頭

さしだしぬ。月雲間より出で、大空瑠璃の如くに晴れて、澄みわたる光清く、其尊さに、彼は煙ふかして眺むることの瀆すわざなるが如くに感じ、直に煙草を窓より投げすてたり。

三

人生、至る處青山ありとは、彼が心に限りなきの自由と同情とを感ぜしむる詩想なりき。彼はこれを空想たるにとゞめずして、實行の上に示しぬ。彼が生涯は漂泊的のものなりし。日本國土、南は九州より、北は北海道に至るまで、到る處に彼の足跡あり。

四

精神的の情死を遂げたる男とは實に彼の事なり。彼が學校に在

るや、能く論斷し、能く斷行し、甚だ敢爲の若者なりき。されど彼女と婚するや、其夢想は實際となり、其理想は死亡したり。彼の一生は妻と共に笑ひ、泣き、語り、食ふことにて了りぬ。友の一人は曰く、彼は幸福ものなりと。然り、彼は幸福ものゝみ。

五

田園の中央に一茅屋あり、防風林其の地をかこみ、一流の清き小川の藪の右よりうねり出で、家の前を過ぎ、これに三枚の厚き板より成る橋をかけたなり。冬は雪この家を閉し、窓よりは燈の光洩る。夏は牧牛十數頭、此家の近傍に徘徊す。これ彼が夢想の中の樂園にぞある。此夢想を追うて彼は北に走りぬ。

六

左より光かすかなる燈、彼を照し、右より清光流水の如き月、
 彼を照しぬ。彼の眼は書の上であり、其半面はやゝ紅く、其半面
 は蒼白なり。傍より此様を見る時は、畫工は尊き美術品を得たり
 と言はん、されど彼が心には今しも恐ろしき戰ありて、彼の唇の
 かすかに動きつゝあるを誰か知り得ん。彼は人なり、美術品に非
 ず。

夜は更けゆくまゝに月は西に傾きて森のかなたにかくれ、蒼白
 く見えし彼の半面は暗くなれり、燈の油も盡きなんとす、彼は影
 の如く座せり。されど一枚より一枚と、其書は讀まれ讀まれて次

第だにのこり少すくなになりぬ、彼かれの眼まなこの光ひかりはいよく鋭すまじし、其心そのこころには戰たいか絶たえざる也なり。

七

此村このむらは一目ひとめにて其貧そのぼづしさと寂さびしさを誰たれも知しり得ぬん、僅わづかに十六七戸こに足たらぬ家數いへかすを一村そんに組くみ、人口じんこう九十じゅうじゅうと言いへど、老少らうせう三分さんの一しを占しめ、のこりの數かすの半なかばは婦人ふじんなり。家々いへいへの立たつ處ところは山やまのかけならずば川岸かはぎしなり、川かはには水少みづすくなく石多いしおほし。山やまは瘠やせたり、然しかるに此村このむらにも一軒けんの校舎かうしやあり。朝あさなくくに集あつまる小兒せうにの數かずは十六名めいなり。

八

彼かれには人ひとの生涯しやうがいといふものゝ、いよく不思議ふしぎにのみなりまさ
 りゆきぬ。おのが身みの過すぎこし方かたを思おもひ、この天地てんちの間あひだに於おける
 命運めい운の怪あやしき力ちからを感かんずること今年ことしの夏なつの夕暮ゆふぐれは去年こぞの冬ふゆの夜半よはに
 もましたり。見みる人ひと、聞きく人ひとの上うへ、怪あやしからぬはなし。友ともは逝ゆき
 ぬ、月つきはめぐりぬ、今日けふも昨日きのふも時はをやみなく翔かけるなり。其羽そのは
 音おとの耳邊じへんを掠かすめゆく様さまの物凄ものすこさよ、あゝ人ひとの一生しやう、これ何者なにものぞや、
 朝あさなく起おきいで、暮くらしつゝ夜よなく夢ゆめに入りてまごろむ、彼かれも
 しかり、われも然しかり、あゝ人ひとの生涯しやうがいてふものほご不思議ふしぎなるはあ
 らじ。おそろしき事實じじつなるかな。

此處にて彼女等と別れつ。

『戀愛』の夢を後にのこし、『自由』の夢を前に描きつゝ、悲哀と希望との感に満たされて行くわが彼時の心をいつまでか忘れむや。とある崖の上に車とまりし時、眼下に濶けしは縹渺たる那須野ヶ原なり。雲霧くらく垂れて其天際を閉しぬ。眦を上げて之を見わたせし時のわが心をいつまでか忘れんや。

戀しき少女を後に残し、自由の地を前に夢みつゝ、われは悲み、誇り、眼を見張りて大空をみたり、蒸すが如き雲の間よりもるゝ、秋の初めの澄みに澄みし蒼天の尊さよ、あゝ彼處に自由の少女われを招くと詩めきたる句を小聲に獨語せし時、一滴の涙落ちたり。

これ少壯せうさうの者ものならでは知らざる涙なみだなり。

十

『われは奈良ならへゆくべきか、湖水こすゐをめぐるべきか、北きたの方かた、山深やまふかくわけ入いるべきか。また南みなみに下くだりて須磨すま明石あかし、水島みづしまなどをえらばんか。皆みなわがこゝろのまゝなり。いづれかわれを抱いだく自由じゆうの母ははの懐よどしほならざるべき』。かくかたりて、彼かれがこゝろに若わかき人ひとの血ちをどり

ぬ。

十一

彼かれがこゝろには過すぎし日ひの彼處かしこ、此處こゝ、睹みるが如ごとくに浮うかびいで

ぬ。

歌志内、空知太、其沿岸、札幌、鹽原、柳井、麻郷、佐伯、船
木、岩國、逗子、萩。

數千枚を盡しても書きつくし難きほどの詩料は、これらのうちに
にみちあふれ居るなり。

十二

かまごごよりたちのぼる煙は何れも此美しき秋の大空に消え
てあとなしといへど、石狩の野に住む人の品ほど數變れるは稀な
り。自由を夢みて手より鋤とることをいなまぬ若き人、はでなる
都の交際に加はり兼ねて世をこゝに遁れし哀の族、狭き本道にす
ら身を立て兼ね、黄金の山を夢みて走込みしならずもの。

十三

わが家の後の丘に一本の松あり。枯野のなかに淋しく立ちて其影長く夕日に倒れしを見るとき、わが心ひとしほの哀を覚えぬ。

わが友とては此松のみと歌ひし事もありき。風の音、梢に、遠き國の笛吹くを聞きては其根に坐して物思ふわが眼、何時しか天外の雲に及ぶ。雲の彼方には少女住めり。

此少女より來りし玉章を讀むにふさはしきは此松の傍のみ、讀み了りて泣くも笑ふも此松のみぞ知る。われ屢々思ひき、今より幾年の後、此松の根に小き墓一つ立ち、其石に白き苔つきて半は土に埋れんとするを、百年の後、年若き詩人見當りて、松に向ひ、

此墓このはかに眠ねむれるは如何いかなる人ひとなりしぞと問とは、松如何まついかに答こたへて語かた
るべきぞ。心こころある松まつは言いふならむ。御身おんみの如ごとき年としわかき詩人しじんにて
おはしき、三十みそぢに足たらで死しし、讀よみし歌うたの數かず々、紙かみに誌しるされしを
悉ことごとくくわが根ねにて燒やき、其灰そのはひは木枯こがらしに吹ふかれて散ちるを詩人しじん見みやりて
『永久わいきうの悲かなしみ』てふ歌聲うたこゑ高く歌うたひしが、二日ふつか計ばかりにて身みまかり、か
しづきの翁おきな、其そのかばねをわが根ねに埋うづめて去さりぬと。

嗚呼あゝわが空想くうさうのあやしさよ。

落日に對す

二十三日及び今日、日没前に室を出で海濱にいたりて逍遙しけり。日將に箱根の山脈を越えて彼方に入らんとするを見、枯草の上^{うへ}に横臥^{わうぐわ}してこれを目送^{もくそう}せり。

余^よが願^{ねが}は天地^{てんち}の不思議^{ふしぎ}を痛感^{つうかん}せんこと也^{なり}。

故^{ゆゑ}に余^よは其心^{そのこころ}を以^{もつ}て此落日^{このらくじつ}に對^{たい}しぬ。相模灣^{さがみわん}をへだて、伊豆^{いづ}の連峯^{れんほう}、箱根諸山^{はこねしよざん}、富士山^{ふじざん}に至^{いた}るまで悉^{ことごとく}く眼前^{がんぜん}に横^{よこ}はる。

黄金色^{わうごんしよく}の雲^{くり}、此等^{これら}の山頂^{さんちやう}にかゝる。水光^{すゐくわう}天色^{てんしよく}相映^{あひび}す。眞紅^{しんく}の

光線紫嵐を縫ふ。目近かには白浪白砂にころがる。仰げば底深き
 藍色の大空に淡然として月夢の如し。日は次第に山にかくれ初め
 ぬ。眼を定め靜視する時、日動く如くして動かす、地動かざる如
 くして動き、山を載せ海を載せて轉ずるを感ず。吾れ天地の色を
 見たり。又其の運動を見たり。自然の美と力とをかすかに感じ得
 たり。されど吾れ依然として煩惱と幻影との裡に在り。吾れを吐
 吞する天地不思議の中に在らず。
 生とは何ぞ。死とは何ぞ。自然とは何ぞ。吾れとは何ぞ。人生
 の意義如何。どの大疑問は依然として吾が感情の上は何の力もな
 し。されど自然已に吾れに近し。

鎌倉の裏山

田山花袋君の來遊に先だつて、或日余は原田東風君と散歩に出
 で、近郊を經めぐつて面白い所を發見し、是非花袋君を此處にと
 もなひたいなど語り合つたことがあつた。其面白い所といふは、
 大佛の左から藤澤道を行くこと七八町、又左へ折れる田圃路の田
 溝にかけし丸木橋を渡りなごして丘へと登り、其丘の頂まで耕さ
 れし畑の間を峰づたひして極樂寺の谷に下る此間約一里ばかりの
 散歩地であるが、ツマラぬ所と言へばそれまで、我等如き田舎に

生うまれて田ゐな舎かに育そだち、今いまは都とくわい會いに住すまねばならぬ身みには却かへつて斯かう
 いふ所ところが嬉うれしいので、里さとは近ちかいし、煙けむりは立たつし、麥むぎ畑はたの盡つくる所ところ
 は林はやし、林はやしの間ちひだから海うみが見みえる。海うみには帆はかけ船ぶね、磯いそうつ浪なみの白しろい
 線せんが遙はるかに光ひかつて居ゐる。どうしても子こ供ごの時とき、綻ほころびを切きらして駈か
 け廻まはつた所ところと變かはらない、おまけに三さん國こく一いつの富ふ士じは浮うかび、相さ模かみの大おほ
 山やまは霞かすみ、伊い豆づの天あま城ぎは煙けぶつて居ゐるといふ多いくらか少めい名いしよ所しよが、つた圖づ
 もあるのである。

其そこ處こで手て紙がみの序ついでに此この事ことを書かいてやり、來らい遊ゆうを促うながすと旅りよ行かうすきの
 花くわ袋たい君くん、早さつ速そくやつて來きたのは土ど曜ゆう日びの午ご後ご、其その日ひは朝あさから雨あめの頼たの
 もしからぬ天てん氣きであつたのが、お晝ひる時じ分ぶんから晴はれそめて花くわ袋たい君くんの

着いた頃は淡々しい雨雲がふわ／＼と沖なる空を漂ひ、夏の初めの穏かな日影や、西に傾いて鎌倉山の新緑を鮮かに照して居たのは我等に取りて何よりの喜びであつた。

さて翌日になると快晴、所謂あつらへむきの天氣、日曜日のことゆる、一日の閑遊と出かけた都會の紳士も少なからぬ様子であつた。起きると先づ大佛の邊まで散歩を試み、十一時ごろ、三人連れ立つて例の散歩地へと出向うた。

大佛の門前より大佛坂の切通までは爪先上りの道、道幅二間位荷車の轍の痕深く土を掘りたる左右には杣山の聳えたる、其麓には所謂猫の額ほどの畑の段をなして作られたる、『旅をする』と能

くこんな道に出遇ふものだ、向の山を一つ廻ると宿に出られるな
 ど考へながら重い足を曳すつて日の暮れ方に歩いたものだ』と言
 つた東風君の言葉は此道の真相を穿つて居る。大佛坂の切通しは
 鎌倉の地質にして初めて作り得るといふべきしろもの、左右の絶
 壁數十間、其頂から差出た若葉の色の鮮明なる、狭く長く限ら
 れた大空の、いや高く仰がれて、其色の初夏に似合しからず深碧
 なる、みな佳し。切通を出ると下り坂、春ならば鶯がほがらかに
 鳴いて居さうな谷間に出たが、鶯は啼かず、蟬の聲ひときは騒が
 しく、頬白が遠くで囁つて居た、此道をだんぐ下つて往くと瓦
 を焼いて居る家がある、この家を最初に、引續いてバラ／＼と田

舎家の一村にかゝる、其中程に例の章魚をつるし、精進あげを並べ、こもかぶりが三樽ばかりの居酒屋、兼、村の若衆の合議場がある。

此茶店の前を過ぎて、程もなく左へ折れて田圃路に入り、田の畦のやうな道をゆくこと二丁ばかりで丘の麓に達した。さて此處の一言せざるを得ないことは、鎌倉のものは野蒜を食はないから野蒜は唯の雑草のやうに田圃に生えて居ることである、兼ねてこれを酒の肴に食ふ筈で味噌まで用意して來たので、田圃路にかゝるや吾々三人で採つた野蒜は都の酒客に見せたい程であつた、採つた野蒜を洗ふ一段になつて、更らに一言せざるを得ないことが

出來る、鎌倉近在では娘が花嫁になると、盛装して角隠をして親類縁者さては兼て嫁入り先きの家が往來して居る家に參上挨拶に及ばなければならぬ風俗、所が野蒜を洗ふべく百姓家の井戸を借りることに三人の相談が決定つた其時此花嫁が丘の麓を、一人の老婦一人の小娘に伴はれて、三人とも日傘を傾けてしなくと歩いて來た様子はまるで晝のやう、吾々は一興を催して見て居ると花嫁は野蒜を洗はして貰ふ筈の百姓家に入つて了つた。あたりに家はなし、花嫁の居る時井戸を借して下さいと押入るわけにもゆかず、頗る當惑したが、東風君遂に野性を發揮して先導を爲し、三人づうくしく押入り兎も角もして野蒜を洗ひ得たが、花嫁は

障子の蔭に坐つて居たので見えなかつた。

野蒜は採つたし花嫁は見たし、景氣好く我々は丘をのぼつた、初夏とは云ひながら、面上から直射する日光はちり／＼と背をやき、汗はだく／＼流れる、若葉の林の蔭に腰を下ろし、懐を開いて風を入れた時の心地！ あゝ愈々夏が來た、楽しい夏が來たと、思はず叫ばざるを得なかつた。

程なく頂に達する、山の低い割合に眺望が廣濶なので、田山君を驚かした。北の地平線は武藏野、極目さへぎるものがない、又大山よりかけて武藏の國境をめぐる連山！ 箱根足柄の諸山よりかけ伊豆の岬角に連なる山脈！ 此等の諸山を壓して立つ富士

大磯おほいそ小磯こいその濱はまついき、峯みねづたひに眺ながめつゝ、路みち、林はやしに入いれば慰やすひ、
 林はやしを出いづれば太洋たいやう！ 水平線すゐへいせんは思おもひがけない所ところに高たかく一線せんを劃くわし
 て居ゐる、小坪こつげ、葉山はやらの磯いそは指點ししてんすべく、三浦らうらの岬みさきは遠とほく水平線すゐへいせんに
 没ほつして居ゐる。

刈草かりくさを背負せおつた村娘むらむすめにも出遇であつた、夏なつならば瓜うりや茄子なすの花盛はなざかり
 と唄うたはれさうな畑はたけで一人ひとりの男をとこが土つちを掘ほつて居ゐる、鎌倉かまくらの歴史れきしは古ふる
 いが自然しぜんは常つねに新あたらしい、我々われわれは鎌倉かまくらの力ちからの字じも想おもひ出ださなかつた。
 程ほどよき松林まつばやしを見立みたて、鼎座ていざし、包つくみを開ひらくと中なかから現あらはれたもの
 が麵麩べんぷにバタ、鎌倉かまくらハム、夏蜜柑なつみかん、冷酒ひやざけが一壘びん、いかに酒さけを飲のま
 ぬ人ひとでも、今吾々いまわれわれが林はやしの奥おくからそよよと吹ふく風かぜに吹ふかれ、草木さうもく

の高き香にうたれ、富士山と太平洋の水とを我物顔にして飲んだ一杯の冷酒の味を知らしたら堪るまい、野蒜はうまかつた、自然はヨーズヨーズ一卷を懐にした謹嚴な人ばかりに親切ではないらしい。感謝す、野よ山よ大空よ大海よ、ごうか我々は林の中にあぐらをかいて、冷酒三杯に舌鼓を打つて、自然の賜を感謝する程の野性を何時までも失ひたくないものだ。

食つてしまへば用はない、歸らうといふのが我々の流儀で頗る殺風景であるが實際だから仕方がない、ほろ酔ひの心地たのしく又峰づたひ、眺望絶佳の處へ来て、此處でやれば可かつたと叫んでも手に残るものは風呂敷ばかり。

大^{おほ}くたぶれに疲^{くた}勞^びれて家^{うち}に歸^{かへ}れば、二時^じ、風^{ふう}呂^ろが沸^わいて居^ゐた。

新らしき年來れ

本年も残り少なくなつた。自分は三十一歳になるのだ。今日ま
 でに何を爲でかしたかと顧みれば實に情ないやうである。文章の
 ニツ三ツも作つた、小説の一二篇も書いて見た。そして幾何の金
 錢と多少の讀者とを得た。それだけである。其外に何かがあるか。
 勿論、人の一生を通じて其成績を計算し來れば如何なる人物と
 雖も高が知れた者には違ひない。悠久なる人類史上より見れば世
 の大人物といはるゝ程のものと雖も僅かに其一頁を埋めるに過ぎ

ないだらう。しかし其が即ち人の一生ならば是非もない事で、吾人一生の立脚地は此事實の上に立てるより外はあるまい。

即ち人は其理想の光を追うて、各人其分を盡すといふ事が、結局の處世法となる、言ひ換ふれば安心立命の歸趣となるのである。

が是れだけでは何となく漠然として振はざる心地がして、吾人の心の底に氷の一片を藏して居るやうではないか。

此道念を思うて其極致に至れば人の心は冷鐵を以て壓せらるゝを感せずんば止まないだらう。

其處で自分は天父に感謝するを禁じ得ない。吾人の靈を導いて此悲壯なる道義の氷宮より脱せしめ、希望と歡喜とを合せて與へ

勇氣と謙遜とを調和せしめ、益々其の領域を廣むると同時に貧富の差等は愈々甚だしく、少くとも個人が此差等を自覺するの情は益々高まりつゝあるのである、

而して徳義の問題は千古一の如く、未だ萬人の満足と信仰を繋ぐ程の解釋を得ず。不思議無窮の天の依然として此世界を覆ふを見る。

斯くて人類の命運は如何。あゝ國家！ 要するに何ぞ、生民をして其の心身の安んずべき處あらしむるの外、亦た目的あらんや我日本は今正に此目的を一より一と解釋すべき場合に立居る也。

心胸を廣うせよ、眞面目なれ、我政治家、文學者、及び宗教家

よ。殊ことに我わが青年せいねんよ。安閑あんかんとして一日いちつを空ひなしうすべき事ことかは。立たつて汝なんぢの分ぶんを此目的このりくてきの爲ためにつくせ。

事業じぎふの計算けいさん以外いぐわい、更さらに高たかく、更さらに深ふかき處どころに吾人をじん日夕にっせきの行爲かうるを勵ほげます動力どうりよくは即すなはち、神かみ在います、神かみは愛あいなり、神かみは父ちちなりとの信仰しんかうであることを。

さて自分じぶんは書かいて此處こゝまで來きた。顧かへりみて此信仰このしんかうを値あたひするほどの徳とくを立てたかといふと、否いなと答こたへるの外ほかなきを知しつて、自分じぶんは今いま更さらの如ごとく、わが信仰しんかうの如何いかに淡うすかつたかを嘆たんずるのである。

どうせ不完全ふくわんぜんの人ひとなれば、自分じぶんとても數々さくく然ぜんと自分じぶんの非ひを數かぞへ上げて泣なくの愚おろかなるを知しつて居ゐる。先まづ大ザツバにやる方ほうがよい

と自分じぶんは兼ねかねなく感かんじて居ゐる。

其それにしても自分じぶんのは餘あまり大おほザツバではあるまいか。餘あまり不ふ規き律りつではあるまいか。餘あまり出でたらめではあるまいか。

神かみの法はふそく則すくは斯かる不ふ規き律りつを許ゆるさない證しょうこ據こを自分じぶんは幾いくたび度も經けい驗げんした

二にが四よと云いふ數すう則すくは神かみの法のりである。

夢ゆめのやうな信しん仰かうに伴ともふ夢ゆめのやうな歡くわん喜きは藁わらを燃もすと一ばん般ぱん、忽たちまち

火ひ忽たちまち灰はひ、其その變へん化くわが餘あまりに果は敢かないではないか。

其そ處こで自分じぶんは裏うちには信しん仰かうの火ひ絶たえず燃もえ、外そとには此この身みを律りつする

處どころの人じん爲ゐる法はふそく則すくを立たてたい。今いま少すこしく嚴げん重ちゆうなる生せ活くわつ法はふを行おこなひたい。

三十三年ねんは逝ゆく。宜よろしい。三十四年ねん來きたれ。そして自分じぶんは此この自じ警けい

を忘^{わす}れぬよう^{あゆ}に歩^{あゆ}まう。

畫

畫を見るに其法ありや、若しあらば予實にこれを知らず、されど予敢て自ら言ふ、畫は予が命なりと。命とは靈を此宇宙に繋ぐ金線を云ふなり。

小兒の好むものは繪なり、予が小兒の時亦然り、殊に然り、何を與へらるゝよりも、繪一枚は予が尤も満足する處なりき。神社に參詣して眞先に予が眼を惹けるは繪馬なりき、馬は殊に予これを好みたり。

予は唯觀ることを好むのみに止まらず、自ら畫かざれば満足せざりき。長じて小學より、中學に進むも、所謂畫學なるものは數學とベースボールと與に予が最好の課目なりき。其うち畫學に至りては、殊に甚しきものありたり。

曾て未だ小學校にあるや、予が友にて予より一級高き村田と呼べる少年、コロンプスを寫したる事あり。非常の上出來にて全校大評判となりぬ。校長はわざ／＼額縁を造らせて、コロンプスは教員室の一隅、大時計と並べて高く掲げられたり。

毎日其前に人山築かれぬ。予も亦村田に其大名譽を祝したり、村田の眉の動き方、異様なりき。唇固く閉ぢ、一種の顫ひは、

口の周圍より頬の肉に波動せり。予は彼の競争者なりし也。而して彼のコロンブスは全く彼の勝利となりぬ。

コロンブスは鼻の下に髭あり、願も頬も鬚髯を以て覆はる、満面毛の中に埋もるに似たり。故に之を畫く、其難きは實にひげなり。而して彼村田の技倆はひげに著はれぬ。校長が激賞して措かざるもひげなり。村田自身が得意も亦ひげにあり。予はたゞ如何にして村田が斯くまでに巧妙にひげを畫がき得しかを怪みて措かざりき。

その頃東京歸りの青年あり、大學豫備門にありしも故ありて歸國し、小學校の近傍に住めり、教員諸氏と來往し、村田も何時か

彼と親みぬ。村田がコロンブスのひげは全く此豫備門先生より傳授したるなり。予は村田に就きて予にも亦、其秘法を傳へんことを求めたり。幾度か慇懃に懇望せしも、彼は只だ微笑するのみ、決して予に教へざりき。予は残念の事に思ひ、獨工夫を凝して、書きては破り、書きては裂き、ひげの練習に全力を注ぎしも、終に村田のコロンブス程に至る能はざりき。其後間もなく予は中學に入りぬ。

予が寄宿せる中學は父母の家を隔つる八里餘の都會にあり、夏期休暇に歸省し、冬期休暇に歸省す。八里の道程たゞ山のみ、急坂斜に山腹を辿ることあり、深谷を下瞰して泡立つ溪流、湛へし

淵、糸の如く懸る瀑を看て行くことあり、參差たる灌木の林に包
 まれて路傍に立つ茅屋を顧ることあり。鈴の音を山彦に響かせて
 煙草スバく、放歌朗々、向の山かげを來る駄賃馬子に出遇ふこ
 とあり。颯々たる山谷の風を長へに吸て、百年の龍影を岩石の上
 に投ぐる老松の下に二三の小兒が嬉戯するを見ることあり。山廓
 けて平野茫々たる處、夏日まさに天に沖して微風そよがす、蒸し
 暑き草の氣に打たれ喘ぎくつて歩む樵夫を見ることあり。歩むに
 つ連れて、山野溪流次第に其趣きを變ずるを眺めて進むことあり。
 一種のチャームは恒に予を動かし、形、色、光、影は、意味深き
 謎語の如く予の眼に映じ、予は一心唯だ如何に畫かば此謎語を解

き得るかと、其れのみおもひくるに思を苦しめ、苦みながらも、夢みる如き
 愉快ゆくわいに耽りて、八里やちりの難路なんろも長きを覺えざりき。嗚呼あゝ當年たうねんのこと
 煙けむりの如く消えぬ、瞑目めいもくして眼底がんていに描き得る者ものは、風呂敷包ふうぶしづみを負ひ
 白しろのメリヤス股引ももひきを着け、草鞋わらぢ覺束おぼつかなく踏みたる少年せうねんが、みぞれ
 蕭々せうせうと降る寂寞せきばくの境さかひを、茫然ぼうぜん四顧しこして辿り行く光景くわうけいなり。予よは此
 想像さうざう畫がわに對する毎ごとに怪あやしき暗愁あんしうの雲くもに幽かすかに泣く。

一昨年さくねんの春はるより、昨年さくねんの春はるにかけて、予よは郷里きやうりにあり、珍めづらし
 くも一秋ひとあきを田舎ゐなかに暮しぬ、予よが樂たのしみは同じく畫がわなりき。

予よに弟おとうとあり、畫がわに熱中ねつちゆうすること或あるは予よに愈なごる、予よの東都とうとに留とどま
 や、彼かれに畫帖がわてふを贈りしことあり。昨年さくねん予よは彼かれと廣島市ひろしましに旅行りよかうした

り、二人の間に最多く購はれしものは畫なりき、二人は土産に迄で畫を用ぬ。

予は彼と談じて各一枚の畫板を造り、二人遠行して山野を跋涉し、或は近郊を漫步する毎に必ず之を携へ、感に觸るもの、直ちに鉛筆に上しぬ。田舎の秋は最も畫に適す、一日、待ち受けし日曜日(わうび)は到りぬ。予等兄弟、畫板を負うて家を飛び出で、箕山と呼ぶ近郷第一の高山を攀づ、森、藪、藁屋、耕人、柿、楓、案山子幾枚の下畫、行く／＼筆に上りぬ。

此山海に突出する岬の脚を爲す。頂平圓にして秋草遠く半腹を覆ふ。瞰下せば周洋三十六灘の水脚下に開け、微茫煙浪、遙かに

鎮西の諸山を眉の如く引く。白帆、漁舟、長汀、曲浦、島嶼、岩
 礁悉く畫ならざるはなきも、予等兄弟只だ斯る縹渺、空濶、雄
 大なる天然の前には、恍として自失するのみ。此日子は馬島、牛
 島、祝島を畫き、弟は佐伯島長島を畫き、予又上ノ關、室津間の
 海峽を畫きたり。畫き得たるもの固より見るに堪へず、兄弟相
 顧み互に嘲り笑ふと雖も、猶ほ筆を投ずる能はざる所以は何ぞや
 筆とるものは拙き筆なれども、筆とらしむる者は自然なればなり
 否、自然を戀ふる人間の靈なればなり。予自身其故を知らずと雖
 も、小兒の時、少年の時、馬の圖に對する毎に或る魔力に打たる
 悲馬風に嘶く圖、長鬣を北風に波打たせて昂然として巖上に立つ

馬をみる時は、わが心誇りて躍りぬ。花落ちて江堤、草煙の如き處、三歳の神駿蹄を揚げて去るを見る時は吾が血湧きぬ。曾て父大阪に上り、土産とて一本の扇子たまはる、開き見れば野馬數十を畫きあり、或者は馳せ、或は嘶き、或は二足立に跳る、予は小躍りして喜びしことありき。

船の圖は普通の趣味に適ふが如し。何れに行くも船は能く畫題となる。予も亦甚だ船の圖を愛したり。自分も好みて畫きぬ。暮潮夕陽に融けて金を流すが如く、大船錨を投じて寂として灣頭にかゝる、水天相接する處歸帆遅し、かゝる圖に向ふ毎に腕白なる予れ、心も空となりぬ。

されど今や予が畫に對する感想の、大に變化したるを覺ゆ。哀
 しき變化は年月と共に來りぬ、紅顏の頬の肉の落つると共に、動
 もすれば冷かなる涙の、蒼頬をつたふと共に哀しき變化は寒霧の
 如く、畫に對する感想の上に掩ひ始めぬ。曩には予畫を好みたり
 されどそは自然なりき。馬の圖、人物畫、山水畫、船舶の畫、茅
 屋の畫、破宮古跡の畫、薔薇花の畫、夕影の畫、水車の畫、之に
 對する予は自然なりき。形、色、光、影の巧みなる配合の前には
 わが無邪氣なる心無邪氣に躍りしのみ、予はたゞ花に眠る胡蝶の
 如く、或る自然の馨ばしき香にうたれて酔て自ら知らず、夢みて
 自ら知らざりき。

されど嗟可憐なる少壯の者よ！ 予敢て自ら可憐と呼ぶ、渠生

れて地に墜つ、年を閱する二十一年、樂き自然の夢全く破れぬ。

畫に向つて輝きし渠の眼、今は畫を觀て暗涙を湛ふるに至れり。

畫に對して叫びし渠、今は黙して沈思するに至れり、畫を觀て樂

しむは一なり今も畫は渠の生命なり。唯曩には食物の如く然り、

今は病者に於ける靈藥の如くなりぬ、此世界の重苦しき、薄暗き

殘忍極まる、鮮血漂ふ、迷路繁き人生の旅行は漸く渠の前に現は

れ來り、滿眼四圍の光景事々物々悉く新らしき説明を渠に求め

始めぬ、畫も亦新らしき異色を渠の前に呈し、深くして悲しき意

味を渠に私語くに至れり。渠の靈は傷き渴きぬ、渠此私語を聞く

時は、一掬の活泉を得たるが如し。

馬の圖、船の畫、只だ夫れ馬の畫、船の圖にして止らず、茅屋

耕人、古跡、森林、小兒、長汀曲浦島嶼の畫、只だ夫れ茅屋、

耕人、古跡、森林、小兒、長汀曲浦島嶼の畫にして止らず、孤

兒が亡き親の畫像に對する如く、其うちに回顧、紀念、想像、默

示の深き悲き遠き幽なる音を聞くに至りぬ。

予此頃小川町の某畫舖に一枚の畫を見出しぬ。そは椅子の上

に二人の小兒、一個は四歳許りの女兒、一個は二歳許りの綠兒、

相並んで眠り、母とも覺しき一婦人椅子の陰に立ちて此なたを正

視せる様を畫けるなり。すやすやと眠る小兒、結ぶ何の夢ぞ。眠

りの神、彼等の爲に謠ふ何の催眠歌ぞ。小兒、無心、眠、夢、知らず何の詩ぞ。然れども予は此畫に不満あり、そは小兒の母小兒をみずして吾等を眺むることなり。予は此母が眠れる小兒を熟視して、其優しき眼の裡には處女も男子も決して想像し能はざる無限の哀思を包まんことを望む者なり。

ミカエルはウオーズウオールスの傑作なり、予若し能ふ可くれば自ら之を畫かん事を思ひ立ちぬ。彼ミカエル、如何に畫かば、詩中のミカエルと等しく現はるべき。ミカエルの兒、群羊、牧草溪流、連山重疊、蒼穹一點の鳶、如何に點出せば、予にヒユマニターの幽音悲調を傳ふ可き、嗚呼予が手畫筆を捨て、已に幾年、

肉にくこほ硬かたくして再ふたび畫ゑがくに由よしなけん。已やんぬる哉かな、いさゝか筆ふでを鉛筆ねんぴつ
に更かへて幽懷いゆうわいをやる。

驟雨

本所ほんじよからまだ汽車きしやの出ぬ頃ころ、自分じぶんは千葉ちばで一泊ぱくし次の日ひは東金とうかね
 健脚けんきやくの人ひとなら半日はんにちの行程みちのりを午後二時ごうごまでかゝつて漸やうやくに辿たどりつき
 夏なつの日盛ひさかりではあり草鞋わらじ喰くひの痛みいた堪たへ難がたく、何も急いそぐ旅たびではなし泊どま
 れど、町端まちばたれの旅人宿りよじんやどの砂埃すなほこりで眞白まっしろな上あがり櫃がまへ腰こしを下をろした。
 足あしを洗あらつて二階かいへ通とほされて見みると、昨日きのふからの疲勞ひらうが一時じに出で
 て、何時いつ眠入ねいつたとも知しらぬ間まにがたつく障子しやうじの響ひびき、眠ねむい眼めを微かすか

に開けて四邊を見廻はす時しも、店の時計が緩に五時を打つた。それにしては薄暗い、まだ太陽のある筈だがと起上つて欄干に浴けさうな身體を投げかけ外面を覗けば、空は一面の黒雲墨の如く吹く風の的なく迷うて軒先の柳怪しく鳴り、驟雨襲ふべき光景である。

宿驛は田舎の都、東金も一筋町の中程迄來れば、可成綺麗な商店軒を並べて家並も揃うて居れど、打見たる此場末は苔白き瓦屋茅屋の高低定まらず、間口廣く老舗とも見ゆるが住む人はと問へば、六十の婆と孫の二人きりと云ふかも知れない。水を撒かぬ往來を夏の日の一日駄馬の蹄で蹴立てられては廂から店先き、物と

して灰を浴びざるはなく、眞向うは菓子屋、東京パンと障子の薄墨からして情なく、左が鍛冶屋右が紙屋で前に草鞋がぶら下げてある。瘦狗一疋走りゆく後から汚物に群がる蠅が急に飛んで逐駆けゆく。以上見てこれぞと面白いもの、楽しいもの、晴々するもの唯一つでもあるか、驟雨、驟雨、この不快を一度に洗ひ流すものは！

下界を壓する空氣重く陰にこもつて打つ鳴神の攻太鼓轟きそむれば、先鋒の風伯は往來に散亂する藁切、紙屑の類を一つに纏めて虚空に捲上げ、忽ちフィと撒き散らしゆく。一粒二粒落ちて來た。暫は向ひの家並さへ見兼ねる程の激しい雨、斜に白く黒く縞

を立て、降る勢すごく、煽られて舞込む雨霧冷やかにわが面を掠める心地よさ！ それも亦直ぐ止む驟雨と思へばこそ。

旅人に取りては晴れゆく雨の名残を見送るほど胸のすくものはなく、それも亦この小氣味よい驟雨なればこそである。

西の天際から雲切れがすると瞬く間に大空拭ふが如く晴れわた
り、傾く日の光の一際鮮やかなるに映じて萬生々として來る。子
供は歡呼する。背戸の雞は羽搏をして時をつくる。飴賣の笛は高
く響く。向の鍛冶屋の鐵砧勇ましく火花を散らす。羽蟻までが藁
屋の前で輪を作つて舞ふ。

新調の番傘を日傘に、半ば身を隠くして顔はよく見えぬ村男の

我宿の前に停立つて主人と二語三語大聲に「結構な驟雨」を繰返
 す、其後からしよんぼりと店先に入つて來た一人の旅客、自分は
 其様子を見て直ぐ我仲間と覺つた。果して「お合宿を願ひます」
 と下婢の挨拶の終らぬうち其處に現れたは渠。「書生さん同士お合
 宿は却つてお賑かで。」と手前勝手な捨臺辭を受けて「何卒よろし
 く」と氣の毒さうな、どこか世慣れぬこなし。肉瘦せ骨高く年齢
 は二十四か五か、荷物は風呂敷包一つ、別に肩から古鞆をさげて
 耳には鉛筆を挟さんで居る。

二

其夜は濕かに語つて一時のうつを自分は聞いたが、其後は知ら

す、五時ごろ自分は目覺めて頭を上げて見ると渠は夢尙ほ深く、
 さなきだに色艶悪しき顔の死人かと思はるゝまで蒼白きをつくづ
 くと見入りて、今更彼が昨夜の告白を思ひ出し、冷かなる涙
 の我頬を傳ふを禁じ得なかつた。

東金から八日市場まで馬車、それから先は徒歩で二人は馬子と
 も話し道草も取つて面白く銚子まで歩み、「未だ日は高いが折角だ
 から君も銚子で今夜は泊れ」と自分の勧めるのを彼は打消し、「イ
 ヤお別れとしよう、昨日の驟雨といひ、昨夜から今日へかけて偶
 然にも君に斯様に親しく相知つた事と云ひ、僕は近年にない愉快
 であつた。又何時逢ふ事やら最早二度と逢はぬ事やら分明らない

が悲しと思へば悲しいやうなもの、僕は時間の長短が人の交
に關係するとは信じない。」と云ひさして暫時頭を傾しげ物思ふ體
であつたが淋しい笑を眼元に浮べ、「紀念と云つては烏滸がましい
けれど、此際に思ひつきもないから、之を君にお渡しする、後
で御覽ください、元來他人に見せる筈のものでないが、君にだけ
は何となく見て貰ひたい心持がするから。」と一冊の手帳をわが前
に出した。自分は強て止めるのも無益なりと思つて遂に手を分つ
事として渠は直に常陸に渡り、自分は銚子に逗り其の夜かの手帳
をくはしく見ると、其折々の隨筆で、要之渠が自叙傳には相違な
きも一人稱を用ひないで、總て「渠」の三人稱を以て書き、我と

我身を批評し賞讃し罵詈し冷笑し説明したものである。只一節一節少しも連續してゐないから何の事やら了解ないこともある。

今其了解り易いものを一二録すれば、

左より燈光渠を照し右よりは清光流水の如き月渠を照らす、渠の眼は書上に注がる。半面はや、紅く半面は蒼白なり、傍にありて見る時は尊き美術品を畫工は得たりとせん。されど彼は人なり美術品にあらず、見よ、其唇は戦きつゝあり、夜の更けゆくまゝに月は西に傾きて森のかなたに隠れ蒼白なる渠の半面は暗くなれり、燈の油また盡きんとす、渠は影の如く座せり。その書は一枚より一枚と讀まれ、て残り少な

うなりぬ。渠かれの眼まなこの光ひかりはいよく鋭すし。其心そのこころには戰絶をのゝきたえざるなり。

又またた

渠かれの行末ゆくすゑを思おもへば心痛しんつうの至いたりに堪たへず、渠かれの特質とくしつは渠自身かれじしんを呪のろふが如ごとく見みゆ。渠かれには野心やしんあり、天才てんさいあり、されど足あしなきの野心やしん翼つばさなきの天才てんさいなり、進すすむ能あたはず飛とぶ能あたはざるなり。常つねに其心そのこころを喰くらひつゝ、僅わずかに其心そのこころの生命せいめいを繋つなぎ居をれり。我儘わがままにして高慢かうまんなり、而しかして蟄ちつせる怠惰たいだの慢性病まんせいびやうに罹かり居をれり。其生涯そのしやうがいは目的もくてきなきの生涯しやうがいなり、目的もくてきあるが如ごとくにして實じつは一種しゆの幻げん影ないを逐おふの生涯しやうがいなり。何事なにごとをかなさんと欲ほつしつゝも遂つひに成就じやうじゆ

する能はざるの生涯なり。

今も昔のまゝなる渠は其後七年ぶり什麼して自分の住所を知つたが、突然書狀の文字すら彼手帳のまゝに、次の一節を手帳の末に書き添へ呉れよと申越した。

渠は空知川の灣に立てり、冬枯の寂寞たる森林渠を圍み、悠悠たる蒼天渠を覆ふ、今や死は渠に取つての驟雨なり、渠は皺唄れし聲を振擗つて叫びぬ、驟雨！驟雨！

想ふに渠は其反響の曳々として空林遠く消えゆくを耳聳て、聞いたであらう。

無窮の生命

御手紙面白く拜讀せり、例に由て鹿角菜の行列を見るにつけ、依然たる君が頑冥不靈のほど想やられて情なく候。先日せんじつの拙書せつしよ中にて神かみの存在そんざいを説明せつめいする爲ためテニソンの一節せつを引用いんようしたるに、其手紙てがみをわざ／＼松村まつむらへ持ち運びもちよこて宇宙現實うちうけんじつの問題もんだいを論ろんずるに一詩いっし人の空想くうさうを基礎きそとする大膽だんだんに感服かんぷくせりと大口おほぐち開ひらいて笑わらひ玉たまひし由君きみの書中しよちゆうには此事このこと隠蔽いんぺいしあれど既すでに松村まつむらよりの報告書ほうこくしよ到來きたりし、始終じゆうの様子やうす現あらはれたる以上いじゆうは、ダム／＼の一丸ぐわんを覺悟かくごし玉たまへ、十九

世紀せいきの科學くわがくといふ奴やつを楯たてにする野蠻人やばんじんにはダムくが相當さうたうと思おもはる。

日々氣象臺いちちくきしやうだいにて風伯雨師ふうはくうしの行方ゆくへのみ氣きにし玉たまふ事ことお役目やくめとは申まをし條でう、近頃御苦勞ちかごろをくちらうの儀ぎに御座候ござそう。然しかるに先日來せんじつらいいたづらなる烏からすあり、君きみが雨量りうりやうを測はかり玉たまふ水盤すいばんにて恣ほしいまゝに行水ぎやうすゐをつかひ、其事そのこと已すでに數あう度どに及およびしとか、其都度君そのつどきみは「又行水またぎやうすゐされちやつたア」と、烏からすが飛とび行く吹上御苑ふきあげぎよねんの杜もりを望のぞんで口惜くちをしさうに叫さけび玉たまひしと云いふ。此この事ことも君きみの手紙てがみには隱蔽いんぺいしあれど、同おなじ松村まつむらの報告ほうこくにて承知しやうちせり。烏からすの飛とび去さり際ぎは、心地こゝちよげに翼つばさをふるひて何なんと鳴なきしやらそこまでは判然はんぜんせず、我家わがやの小作こさくに宇之助うのすけといふ髯面ひげづらの男をとこあり、失禮しつれいな

がら何處となく君に似たる様思はるれど、但し宇之助の祖父は權兵衛と申せしや否やは余未だ確かむる能はず。

『此 Idea は數の Infinite といふ事より來る者である、故に無窮無限といふ事を説明するには、勢數の連續を説くを要す、君等如き數理の思想なき者はとても駄目だ、併し試みに次の式を見給へ解るまい』

確かに解りません、最早議論もかうなつてはおしまひに候、實に何事も算數に限る！ 余も歸京の節は遠州灘邊にて舷に腰かけ數で $\Delta\Delta$ 式に出來上り居る大空の星を數へ、眞逆様に波の上に落ち「又落つちやつたあ」とでも叫ばむ哉。

さて中央氣象臺に於ける君が近頃の日課、詳しく承はるを得たれば余の昨今の日課をも申上げん、第一、晝寢、唯それ晝寢のみ毎日ごろ／＼して居るだらうとの御推察はあたれり、由つて余は晝寢の事をお知らせするが最も妙なりと信ず。

余もまさかに朝からは寝ねず。さなきだに静かなる山家、晝飯を終ればこそりともせず、風通しよき奥の六疊を占領し、枕許に紀行、航海、探検類の雑書を積みみて手あたり次第に讀む、むしろ眺める、心頭には一の煩慮なく身外には些の喧擾なし、唯直ぐ頭の上なる松林を渡る風の音の幽遠なる恰も絶海孤島の汀に繋がる浪の音を聞くが如きのみ。何時しか飄々たる我が魂も亦微茫煙

浪の裡に消え行く、或時は一頭の駱駝に乗じて極目際なき曠原を横ぎり、無窮の路を辿りて、舊き昔の眠の國に運び去らる。然るに昨今は讀みし書籍に空想を煽られ過ぎて眼さへ、遂に寢はぐれしかば、獨り庭に下りて葡萄棚の下なる庭石に腰打ち掛け、青葉の光を仰いで茫然たる折しも、決して晝寢せし事なき弟の文二、眞直なる櫻の杖と小刀とを手にして裏門より入り來り、

『兄さん之れがステツキになりましたようか。』

『なるとも。』余の葡萄棚を仰げるを見て、

『葡萄なら隣屋敷のが能く熟して居ます、摘みに行ましようか。』

『行かう。』

裏門うちもんを出てで笹藪ささぶくの間あひだつらを通ずるこみち小路ゆを行けば間もなく隣屋敷となりやしきなり
 茲こゝは三方丘ぼうをかに圍かこまれし小さき谷ちひにて以前いせんは井上いのうえといふ一家代々の
 住所ちうしょなりしを、十餘年前よねんぜんこの此一家舉かこぞりて北海道ほくかいだうに移住いぢうせし爲め途
 に我家わがいえの有いりとなりつ、今は唯屋敷跡たゞやしきあとのみ残りのこり。曾かつて瓜うりや茄子なすびの
 花はな咲さきし此この小ちひさき谷たにも我家わがやの人手ひとで足たらぬ儘まう打ち棄すてたれば何時いづつし
 か野原のばら同様どうやうとなりては夏草なつぐさ生おひ繁しげり、小松こまつさへ之これに雜まじりて中々
 に風情ふせいあり。流石さすがに葡萄ぶどうの古木こぼくはもとの儘まゝに井戸いどの側かたはらに残のこり半地
 に委まかし半其蔓なかばそのつるを昔むかしなじみの老梅らうばいに托たくして紫むらさきの房ふさふさ／＼と垂たれ
 たり。二人ふたりは互たがひに二房ふたよさみ三房ふさよ能よく熟じゆくしたるを摘つみ、弟おとうとは程ほどよき小蔭
 に陣取ちんとり葡萄ぶどうを食くひつゝステツキの細工さいくを初はじめしが、狗頭いぬがしらを刻はる

とて器用きように小刀こがたなを用もちひ連しきりに苦心くしんするさま、能よき畫題ぐわだいなり。余よは
 弟おとうとより二十步はつか許ばかりを離はなれ、雜木ざまきの影涼かげすずしき草くさの上うへに身みを横よこたへて
 甘あまき葡萄ぶどうを口くちにしつゝ、靜しづかに四邊あたりを眺ながめ折々をりく弟おとうとの方ほうを見遣みやり、
 又また遠とほく天外てんぐわいを望のぞみて崩くづれんとする雲くもの峰みねを見入みいりたり。
 白雲はくうん一片ぺんいうく悠々うゆうとして漂たゞよふとき、薄うすき影かげは森もりを越こえ丘おかを越こえて來きた
 り、我わが小ちひさき谷たにも暫しばらくは光ひかりを失うしなひしが、雲くもの溶とけ去さると共どもに影かげも
 亦また消きえ失うせつ、人ひとを醉よはしむる様やうなる夏なつ草ぐさの香かは鼻はなをうてり、草くさ
 や木きや花はなや葉はや野のや丘おかや總すべて盛せい夏か日にち中ちゆうの光ひかりに醉よひ、眠ねむり、溶とけ、
 而しかして満まん足ぞくせり。天てんの瀨氣せいきは地ちに下くだり地ちの精氣せいきは天てんをつけり。
 恍惚くわうこつとして之これに對たいする余よも溶とけんとす、嗚呼あゝ此時このとき！ 昨日さくじつなく

今日なく又明日なし、唯此時即ち無窮なるを感じぬ。更に小蟬の吟聲の絶ゆるが如く絶えざるが如くして單調なるを聞けば、人をして日没を想像せしむる能はず。長きく此夏の日の此儘にしてをやみなく續くかと覺えし。

ふと弟の方を見れば彼は緑陰の涼しき影を全身に浴びて背の邊りは青葉を洩れし日影の斑點動搖せり。彼は一心を込めてステツキの細工をなしつゝ一向に他を顧ざるなり。十二歳の少年！一日なほ五年十年の長きを覺ゆるは當に此時なるべし。かゝる時谷の西をかこめる丘の小路を「童も何時かは翁なり」と節面白く歌ひつゝ、姫小松の間を行く少年あり、弟は此聲を聞くとひとしく

きつと彼方を見やり「翁も昔は童なり」と高らかに歌ひし様は、吾此所に在りとの相圖かと思はる。「太田！」弟は叫びて彼の少年を招きぬ。少年は頭を掉りて弟を招き太きステツキを差し上げたり。彼等の少年の仲間にステツキの流行ありと見ゆ。弟は余に頓着なく丘の方へと走り行けり。見よ、彼等は暫く互のステツキを誇示する様なりしが、忽ち相ならむで身に不相应なる棒を打ち振りつゝ先の歌を聲合せて歌ひ、小松の間を彼方へと行くなり。彼の歌は小學校長が彼等の爲めに作りしといふ勸學の歌なりとか弟の之れを歌ひつゝあらゆる悪戯に目を暮すを余は見たり。童が翁になる、之れ彼等には全く無意味なり、否全く無感覺なり、見

よ彼等かれらは唯ただ之これを節面白ふしおもしろく歌うたひ、其そのリズムに自己じこの樂たのしき魂たましひをう
 かつて終日しゅうじつ野山やまをかけまはるなり。余よは彼等かれらの姿すがたを目送めくさうして「無
 窮きゆうの生命せいめい」其物そのものを見るみが如ごとくに感かんじぬ。

之これはしたり、折角せつかくの晝寢ひるねの報告ほうこくが又またもや「無窮ききゆう」の題目だいめくとな
 り了むじりぬ。併しかし君きみ、お互たがひは實際じつさいの處ところ最早いちばんおしまひに候まじ、たとひ君きみ
ナンバーれんぞくは數かずの連續れんぞくと△△式しきにて宇宙うちうの廣ひろさと生命せいめいとを測量そくりやうするとも、余よ
 は詩しの想さうにて力ちからむとも、互たがひに無窮むきゆう々々ゝゝとやかましく唱となふるに至いたつ
 ては、有窮いうきゆうの窮きゆう、窮きゆうの又また窮きゆうたるに過すぎざる也なり。

死

此世を去りて冥界に下りし人の、「あゝ我曾て今日の死あるを思はざりき」と叫ばむか。其聲のいかばかり悲かるべき。渠は生て屢々死のことを耳にし、死の事を見、これを語りて或は泣き或は笑ひたり。されど未だ曾ておのれ自から眞に死すべきを眞に感ずることなかりき。

戀の日記

一

彼の前には書が開かれてある。併し少しも書物は見てゐない。恐らく彼は自分が机の前に坐して居ることも忘れて居であらう。顔は言ふに言はれぬ喜びを湛へて、身を壁に寄せかけて何とも言へぬ心持のよささうな笑を目元と口の邊に浮べて、のどかに、ゆるやかに巻煙草をくゆらして居る。

秋の日脚が西に傾いて窓から夕日がさし込んで居る。なまぬる

い夕日ゆふひが―。外面そとは折々をり／＼車の音おとが高く響ひびく、子供こどもの笑聲わらひをが行ゆきす
ぎる。風かぜはそよとも吹ふかぬ、夕日ゆふひを真まともに受うけた庭木にはきの絶頂てつべんの
小枝こゐだが時々とき／＼頷うなづいて居をるばかり。

『あゝうれしかつた、何處どこらまで歸かへつたらう。』

彼かれは思おもひつゝけた。

世よには戀こひに惱なやんで苦くるむものもある、死しぬる程ほどの悲かなしい思おもひをする
ものもある。そんな悲かなしい心こころで見みると、静しづかな秋あきの夕陽ゆふひほど心細こころゆさ
い者ものはない、遠とほい／＼昔むかしの世よの俤おりかげを面まのあたり見みる様やうな心持こころもちが
するものである。

彼かれも昨日きのうはさうであつた。庭木にはきの影かげがだん／＼長ながくなつて石段いしだん

を一つくと登つて來るのを見ては夢心地になつて、身も魂も消え入る様に思つた。

すると、今日は待ち焦れてゐた少女が來て、何を話すともなく二時許を瞬間にうれしさに過して、之れからは度々遇ふ事が出来る事に約束して、彼女はいそぐと歸つて行つた。

二人の戀の底は涙である、しかし今はそれを彼も彼女も忘れて了つたのである。

夕日が次第に疊の上をはつて、投げ出した足から胸までを静かに温めた時、彼は身動きもし無いで身の溶けるのを得て居るらしい。

熱沙漠々のサハラを旅する人も折々は甘き泉涌く涼き木蔭青き
オーシスに出遇ひて死ぬばかりなる疲を休むる由あれど人生れ落
ちて死の墓に至るまでの旅路には唯一度戀てふ眞清水を掬み得て
暫時は永久の天を夢むと雖も、忽ち醒めて又其淋しき行程に上ら
ざるを得ず、斯くて墓の暗き内に達するまで第二のオーシスに出
遇ふことなく、たゞ空しく地平線下に沈みうせぬる彼の眞清水を
懐ふのみ、果敢なきものならずや。』

斯て渠は深き歎息をつきぬ。

『戀の眞清水はいつもく涌きて流れ疲れし人を俟てども、たゞ

これを番する少女のみぞ幾度か／＼變りゆくなる。少女も一度は年若き旅人を伴ひて此泉に掬めど、いつしか其の手を泉にさし入れてこれを濁し、若者をこゝより追ひやりて、おのれも亦たあへぎ／＼其跡を逐ひ、苦しき熱き淋しき旅路にのぼる。』

この時渠は遠方の空を眺め入りつ。

『われ曾て沙漠の悲劇と題する畫を見たりしが、一疋の猛き獅子と畏ろしげなる長蛇と、茫々限りなき沙漠の真中にて苦闘する様を描けるものなり。これぞ此世の悲劇なるかも。』

渠は戀を思ひ人の世を思ひ、少女を思ひ、沙漠を想ひ、オーシスを想ひ、想は想を聯ね來りて、深き哀より深き悲へと沈み入りぬ。

三

『世の中がこんななに美しいものとは思はなかつた。』と近眼鏡の上うへに更さらに他の近眼鏡きんがんきやうを掛かけて渠かれは嘻ちれしげに叫さけんだ。

四

『スモーク』の一冊さつが机つくろの上うへに置ちいてある。

今月今夜こんげつこんやは十一月十一日じゅういちがつじゅういちにちの夜よである。自分じぶんと彼女かれとが二年前にんねんまへの今月今夜こんげつこんやは結婚けつこんした日ひである。

一昨夜さつこやは今井君いまいひくんと共に赤坂あかさかの或る料理屋せうりやで快こころよく飲のんで樂たかしく語かたつた、其夜そのよ今井君いまいひくんと別わかれて後のち、直ただに治子はるこの家うちを訪とうた。此日このひ自分ぶんは治子はるこの許もとへ心こころの緒琴を一冊さつを送おくつた處ところ、直すぐ送おくり返かへして來きた、

祖母そぼの名なを以もつて。自分じぶんはどんな苦くるしく腹はらだしく、悲かなしく思おもふたらう、醉よひにまかして不平ふへいをもらした。治子はろこは泣ないた。

昨夜ゆうべ治子はろこから手紙てがみが來きた。あ、憐あはれの少女をとめよ、彼女かれはわが小説せうせつを讀よんで其身そのみを千葉富子ちねぶとみこにひきくらべた。悲かなしい哀あはれな美うつくしい手紙てがみであつた。

自分じぶんは昨夜さくや夜更よよけて、一昨夜さくや治子はろこの宅たくより來きて後のち、午前二時半ごぜんじはんごろまで起おきて居ゐて作つくつた新體詩しんたいしを書かきあらためて、手紙てがみを書かき添そへて、其それを今日けふ午後一時頃ごころ治子はろこの宅たくへ持もつて行いつ「水沫集みなわしよ」の中なかに入れて密ひそかに渡わたした。

治子はろこは自分じぶんを見みて絶たえず涙なみだぐんで居ゐた。

これが一昨日來の事柄のあらましである。若し詳しく書いたら
 なかく一章ではすむまい。實に色々な事が雜つて居る。

今井君が自分のために「スモーク」の第八章を語てイリナがリト
 イノフに送つた書狀を讀んだ時自分は涙が込みあげて來た。其の
 夜の酒がどんなに此の悲しい心に沁んだらう。其の夜の明月がど
 んなに此の悲しい心に映つたらう。

何事も神の御心にまかし奉る。自分は男らしく歩みたい。あゝ
 實に男らしく。

自分の前途は未だ甚だ望が多い。文學者としても政治家として
 も自分は未だ實に此腕を十分にためした事がないのである。

日本の今日の詩界も政治界も少壯有爲の人物をまことにまつて居る。自分は此の生涯を仇に過ごしてはならない。

戀は實に悲しい。而し悲んで壞りたくない。此悲に堪へてこそ此の情は益々高く高く清くなる。

今日の曇天が、ごんなに自分には悲しかつたらう。

自分はごうしても日曜は教會に行かなければ此命がもてない。自分は神なくしては生き難い事をつくづく感ずる。

戀の悲が破れたる時に友愛の光がごんなに強いかを以て自分の胸に沁んだらう。信子の時も實にさうであつた。

あゝ戀よ。何時までも自分を苦しめ弄するぞ。

自分の作つた「おとづれ」が國民の友に出た。これが第二の小説である。世間は冷やかに迎ても宜しい。治子は書き送つた、「此の「おとづれ」を読み玉ひし人多き中に初めの一字より終りの一字まで涙と共にくり返し〜讀みたるは私一人ならん」と。自分は満足である。悲しい満足を感ずる。實は北海道の少女にも讀ましたい。

たとひ治子が自分を此後、永久に忘れてしまつても、彼女はとも一度深く刻まれた深い戀の悲みの中にひそむ樂を忘れるわけにはゆかぬ。よろしい。利害得失のために、動き易いのは女性の性である。傍人が勝手に製造し想像する利害論は勝を占めてもか

まはない、人情ヒユマニテーは最後の勝利者シヨウリシヤである。

遠トホからず治子ハロコから何か手紙テガミをよこすであらう。若ニしよこさなかつたら、それはイリナの手紙テガミと同じ心ココロであるに極キマつたのだ。自分ジブンはリトイノフ程ほどには泣なくまい。静しづかに天てんの命めいを受けうける許ばかりである。却かへつて治子ハロコの心こころは絶たえ間まなき苦惱くなうに破やぶれるであらう。

自分ジブンは今いま、「スモーク」の八章しやう及び九章しやうを讀よみ了をばつた。八章しやうに於おてリトイノフはイリナと別わかれ深ふかき絶望せつぼうに陥おちり、幾年いくねんの日月じつげつを經へて九章しやうに於おて再會さいくわいした。

自分ジブンの前まへに小ちひさな十字架じつかが置おいてある、紫水むらさきずるしやう晶すいで作つくつて有あつて金具かなぐは金きんらしい。これは昨日きのふ治子ハロコが送おくつてくれたのである。治はる

子の手紙にこれを私の心と想うてくれると書いてある。

治子は今日、自分の去つた後、祖母と共に叔父の處へ行つたこの事、今井氏が路であつたさうだ。自分は言ふに言はれぬ不安を感じて居る。丁度、イリナが舞踏會に望んだ後のリトイノフと同様な感がする。自分はしかし、リトイノフのタテイアナを持って居ない。自分を愛した、少女は二人まで其の愛を破つてしまつた。治子は再び自分の愛に身を投じて來たが、何となく自分はこれを不安に思つて居る。

自分には殆んど今、光を見ない花の様な極めて淋しい感がある。自分は決して幸福者ではない。

自分と治子との關係は如何したらよからう。決して戀の秘密は永く保たれるものではない。打ち明けて凡てを命に決し様か。あくまで秘密にして命の來るを待たうか。如何なる命が來ても之れを甘受し様か。自分には今は決し兼ねる。

夜は大分更けた。汽笛の響が遠くで聞える。彼は（こゝには彼と書く）。今更の様に都會の生活に氣付いた。實に妙な處だ。何のために自分は此處に生活するのであらう。何のためにこゝで今の様な生活をするのだらう。東京がなせ自分にはいゝのだらうと渠は思ひつゝいた。

彼は叫んだ、「戀よ戀よ！ 戀ほど時間を浪費するものあらんや

戀の最中に居ては何事をなすにもものぐさく、心は何時にもまどろみ、戀の破れし後は何事をなさんとの氣力すら碎けて心は痛み苦む。戀よ戀よ。願くは少女を選択して其の光をそゝげ。」と。

五

「戀とは何ぞや。」かゝる問を自から發し、戀といふ事實に深き思を凝らしつゝ戀するものあり。渠の如きは其の一人なり。

六

「戀の邪魔をせらるゝほど苦しい者はない、それも判然と異存でも言はれて行く末の夢を打壊されるのなら、手術が亂暴なだけに

或は痛苦が一時である、亦た其の異存に向つて十二分の抵抗力も奮ひ起されて、此方の意地も我慢も元氣を出す、従つて張合があつて面白い事もあるが、それと違つて何とはなしに二人の中をせかれたり、それとなく惱まざるゝのは、二人に取つて之れほど苦しいものはない。いつも此の慘酷な仕うちを女の母がつとめるものである。戀はいつも母親が破るにきまつて居て、いつも又、其の仕うちが女丈けに蛇の生殺と同じことである。自分の身の上から先づ一例を引いて見ようか。」と或る四十男が圓居の若い者を相手に話しだした。

若い者には何よりの御馳走である。皆んな此の哲學者の戀の身

の上うへばなしを珍めづらしさうに聞きき込こんだ。哲てつ學がく者しや先せん生せいは頗すこるまじめ
に語かたり出だした。

『そこで又また、不ふ思し議ぎな事ことは二ふたり人りの仲なかだちをするものは何い時つでも大たい
抵ていは母はは親おやにきまつて居をるのさ。母ははが種たねを蒔まて、芽めをふかせて、そ
れでやつと氣きがつく、氣きが付つく事ことが則すなはち戀こひのためには殆ほとんど日ひ光くわう
やうなものである。二ふたり人りは次し第だいに氣きをもみだす、それ丈ただけ情なさけが深ふか
くなる、泣なく、行ゆく末すえをはかなむ、それだけ戀こひしさが増ます。戀こひの日ひ
光くわうは秘ひ密みつの暗やみのうちでこそいよく温あたたかに照てるものでる。母はは親おや
は此この様やうに氣きが付ついて愈いよく々ま眞ま綿わたを二ふたり人りの首くびにまきつける。二ふたり人りは
苦くるしさに益ますます々まだきしめる。母はは親おやが無む理りに離はなした時ときは、生なま木きを割さく

といふ比喩たとへが最もよく穿うがつて居ゐて、双方さうほうが枯かれてしまふか、さなくば片輪かたわりの者になつてしまふ。さうなると父親ていおやは流石さすがに男をとこだけとて、も離はなれ難にくいものと見みて取とつたら、ふいと氣きをかへて二人ふたりの望のぞみにまかせてしまつて、寧むしろ二人ふたりが一いつになつた行末ゆくすゑをかれこれと氣きをつけて無事むじの發達はつたつと立派りっぱな實みの成なる日ひを待まつことにする。母ははばかりの娘むすめと戀仲こひなかになつた若いものほど氣きの毒どくなものはない。君きみだちも之これは氣きを付つけ玉たまへ。僕ぼくの例れいもそれさ。』

と哲學者てつがくしゆせんせい先生せいせいは言いひかけて一寸眼ちよつとめをそらして天井てんじやうの隅すみを見みた、昔むかしの事ことを思おもひだして、其冷そのつめたい血ちの何處どこにかまだぬくもりが殘のこつて居ゐるらしく、暫しばらく無言むごんであつた。

『と言つた處が、僕のは實はそれほど事でもないのさ。娘と言ふは其の時二十三であつた。僕は二十八であつた。娘も僕も決して初戀ではないので。僕は一度死ぬほどの目にあつた後の事であるから、もうさままでは熱しなかつた。しかし其娘が自分のみに焦がれる様のいかにも烈しいので遂には僕も心を動かしてしまつたのみならず、或晩、娘が身の上の耻を白状して泣いてからは急に憐れになつて、自分の俠氣がむらくと起きてきて、此娘の行末をおれの愛で守つてやらうと言ふ氣になつた。さうすると自分も可愛さといぢらしさが増して來て、自分の以前の戀とは少し心持の違ふ一種の愛着の念が自分の沈んだ血をかき亂して來た。

『そこで母親は二人をどうしたいらう。變に邪魔をした。自分は變にといふ外に今でも母の仕打を形容する事が出来ない。』

自分は母親の邪魔を何と感じたいらう。そこで少し僕は僕のこの頃の人物を説明する必要がある。』

『自分は自分で其頃常時も思つて居た。到底自分の如き人物は普通の母親に知られる筈はない。なせならば自分は丸で普通の青年と其趣きを異にして居るからで。つまり詩や哲學や宗教の領地に籍を置いて居て、人生の事を自分の問題にして居た、たゞそれを學問の机の上に乗せて置くのではなく、僕の感情といふものが丸で躍て熱して或は狂つて此問題に左右さるゝから、「立身」とか「出

世」とかいふ標語は餘り自分の耳には勇ましく聞えなかつた。普通の母親が、どうしてそんな若い男を好まうぞ。氏無うして玉の輿に乗るといふが母親の娘に對する夢想である。「玉の輿」自分のやうな人間は冷笑したくなる。卑しみたくなる。その様子が自分の舉動に出る、母親は益々自分をいやがる。

自分は初戀の時も此流で母親の反對をうけたが其時は、自分も丸で戀の狂人であつたから、猛然として母親と戦つた。そして勝つた。そして遂にまけた。』

『さて此度は最早やかゝる熱は起らない。自分はどこまでも冷笑したくなつた。母親がいやなら、おれも此戀はごめんだ、氣の毒

ながら御前の娘は捨て、やる。そのかはり、娘の心が其のために死んでしまつても知らないぞ。と言ふ氣になつて來た。』

『しかし娘はどこまでも自分にこがれ、自分を信じ、自分を命ともして居た。それは實をいふと娘は以前、身に……有るとは云ふもの、戀といふ戀は自分に向つて初めて起つたので、二十三にもなつてからの初戀であるから、丸で夢中なのである。又た二十三とはいふもの、末子であるから心持が何處かに幼ない處がある丈けいぢらしい程、自分にこがれてしまつた。どうして自分に此娘が捨てられやう。そこで自分は初戀の時、狂氣のさまで母親と戦つた心持とは一種違つた反抗の念を起した。』

『すべて此等こゝらの念ねんが日々、三人にんの間の極きまめて微細びさいの出來事できごとの上に
もほのめいて、笑わらひつ語かたりつ、何なんでもない中うちにをり／＼三人にんを
なやまして居ゐた。尤もつとも苦くるんだのは娘むすめである。それを見みる自分じぶんは又また
たそれ丈だけ心こゝろをなやました。』

孤立の悲惨

人間が自己の動物界にある事を忘れ、自己を禽獸以外に置くことによりて生ずる誤解の最も大なる一を、人間互に、其思想感情を十二分に交換し得ると信ずる事である。然り彼等は明かに斯く信じない。されど實際に於て斯く信ずるかの如くふるまふ。而して其結果は人間の種々の失敗悲惨の原因となる。禽獸に言葉がない。彼等は互に其の思想を交換する事的手段を最も缺いて居る。草木は更に缺いて居る。然して人間と雖も、亦其實は大に此手段

を缺いて居るべき筈である。人間の不完全なることの一は實に此手段の缺乏で有る。

あゝ孤立よ、而して人間は社會を成して居る。人間の孤立的分子と、社會的分子とは未だ一致して居ない。人間は孤立して而して團居して居る。彼等は他の到底解し能はざる者を其胸底に藏しつゝ、互に交際して居る。言葉を換へて言へば、人間は他に示すことの能力を有せざるものを懷きつゝ、他と交際して居る。あゝ悲慘よ。世間多くの悲慘が、此缺點から來り、又た人間が此缺點を自覺せざるより來ることが更に多い。

人は今猶ほベベルの高塔を建つる時、其言語の不通を來せしと

大差たいさなき時代じだいに在あることも知しらざる也なり。

わが過去

彼は夜更けて獨り燈火に對し、默想すること多時、

彼が心は靜かなる事、山間一碧の湖の如し。

彼は思へらく、「わが過去は熱情と理想と私慾との戰なりき。

われは多く思ひ、多く感じたり。されど多くの勤勞を執らざりき。

わが過去をわが經驗としてのみ視れば、實に價ある經驗と言はざ

る可からず、されど若し理性の示す處に照さんか、怠慢放逸の生

活と言はざる可からず。」と

されど彼は尙ほ自ら曰はんと欲して曰ふ能はざる者を、其の過去の經驗中に感せり。彼は其の過去の生活をよろこぶの情を悔ゆるの情との半々を感じぬ。

而も確として思へらく、「我が過去は過去として價あるものたらしめよ。されど斷じて將來に於て斯る怠惰なる生活を許す可からず、若し我尙ほ斯る放逸なる生活を送りて改むる能はざらんか、我生涯は失敗なるべし、自殺なるべし」と。

彼は又た思へらく、「我は勞働勤勉の樂を知らざる乎」と。

若し人を二種に分てば、其手近にあることを爲して着々其歩を

進め行く人ど、常に鼻頭を去る幾尺の空間に或者を描きだし、
 之れに被らしむるに黄金色の光澤を以てしてこれを望見して拱手
 自ら楽しむ人との二種なりとす。渠の如きは其の何れに屬すべき
 人乎。

趣味について

人の妻たり母たる人の責任の重なる者は家庭内の趣味として高潔温健和中ならしむるにあり。

人として趣味なきはなし、たゞ悪趣味たる好趣味とたるとの差あるのみ。

「嗜好」と「趣味」とは混合すべからず。嗜好とは其人の楽しみなり趣味とは其人の道義的慾望なり。

例せば勞作の如き、これを苦痛と思ふ者には苦痛なるに相違な

し。若し人ありて、此苦痛を忍んで勞作に従事するとせよ、忍耐の徳は彼れにあり、されど以て彼れが感ずる苦痛の分量を減じたるには非ざる也。又た人あり、其勞作して成就する處の作物に對し深き興味を覺えて、其勞作の苦を忘れりとせよ。斯る興味彼れ求めに應じて如何なる場合にも彼を亢奮さすべく生すべきか、斯る興味は彼の欲するまゝに永續すべきか。今日までの美術家は皆なこれを否定せり、果して然らんには、興味は勞作の苦痛を或時の間忘却せしむるの力はあれど其人の勞作其物に對する苦痛は消し得ざるなり。此時に當り彼の農夫等が習慣の力を藉て勞作の苦痛を感ぜざるが如き、前の二者に比すれば其幸の大なる決して

同日の談に非ざる也。されど若し茲に此等三者が勞作其者に就て深き趣味を感得せりと假定せば如何。勞作の苦をする實に消極的なりし者が却て勞作の樂を覺ゆる當に積極的となるべき也。

趣味の教育の人生に如何ばかり大切なるかはこゝの事なり。若し教師ありて其子弟に教ふるに勞作の報酬の如何に大なるを以てせば如何、これ結果の大なるを示して勞作の苦を忍ぶ事の甚だ少なるを教ふるなり、これ亦可なり、されど更に進で勞作其者の如何に尊きなるかを教へ、これに對する趣味を鼓吹すると孰れぞ。しからは如何にして勞作の趣味を子弟に吹込むべきか、此問題を提起して遍ねく思起するは佛の巨匠ミレーが暮鐘の畫なり。夕

暮ぐれの雲くもの色いろの金色こんじきなる、マベアリヤの鐘かねの音ねの響ひびきそめたるかと
 思おもはる、寺院じゐんの高塔かうたふの遠林ゑんりんを出いでたる、兩個りゅうこの農夫のうふ彼等かれらは夫妻ふさいな
 り。今いましも一日じつの勞作らうさくを了をはりて、さて漸々やうききろ歸路きりに就つかんとする時とき
 靜しづかに野のづらを渡わたりて響ひびくはマリヤの鐘かねの音ねなり。二人ふたりはこれを
 聞きて相對あひたいして首くびを低たれ、慈愛じあいの天父てんぷに向むかつて祈念いのりをさゝげつゝあ
 り。これ實じつに大おほなる意味いみを含ふくめる名畫めいぐわに非あざるや。教師けうし若もし此圖このづ
 をかゝげて子弟していに對たいして告つぐるに勞作らうさくの事ことを以もつてせば如何いかに。

青桐

予よが窓外さうぐわいに一本ばんの青桐あをぎりあり、春はるの終りをよより、夏なつの終りをよに至る間いたあひだ
 の予よの無二むにの愛友あいゆうなり。朝光てうくわうはじ始めて明あきらかなる時とき夕陽せきやう最後の光ひかりを投な
 ぐる時とき、細雨さいう蕭々せうくの時とき、炎天えんてん風なき時とき、其色そのいろ、其光そのひかり、其音そのおと、實じつに
 予よが無二むにの愛友あいゆうにてありき。さるを秋風しゅうふう至りて予よの身みに様々さまざまの心しん
 配ばいを送ると共ともに此愛友このあいゆうの身みの上うへは尤もつとも悲哀ひあいの有様ありさまに立至りぬ。嗚あ
 呼熱愛あねつあいに堪たへたる夏なつの日ひは去りて搖落ねうらくの時節じせつは徐々じょじょに襲おそひ來きたる。

悲哉かなしいかな
 哉〇

憐れなる兒

一昨日は日曜日なりき。其夜吾二階を下りて坂本老人と物語りす。座に嬢と收二とあり、互に四方山の噂に笑聲相續ぐ。最も樂しき晩なりしなり。

佐伯の町に一個の小乞食あり。此乞食の身の上も亦た話の種となる。其不潔なること語られ、而して又其愚鈍なる事語られ互に哀れがりぬ。暫時にして主人の翁吾に向て曰はる、様、さて先生吾家にも亦た一個の愚者あり、已に御存じの如し。其愚かなる事

譬へがたなき程なり。如何にすれば宜しきか、殆んど當惑致し居る也。先生別に御工夫もなきものに候やと。

吾此語を聞き、直ちに翁の心を知り、半ば頷づき半ば笑うて、實は甚だ挨拶に困りぬ。然り御宅には馬鹿者ひとり御座りますとも言ひ難ければなり。

馬鹿者とは誰ぞ、愚者とは誰の事ぞ。可憐兒なり。

吾等兄弟はじめて此家に移つるや、直ちに一個の小兒を見たり年の頃十か十一なる可し。

これ坂本氏の子に非ず、坂本老人に妹あり、嫁して他に出づ。此子は則ち其孤兒の一人なり。母と一人の姉と共に、今は坂本氏

に寄食きしよくの哀あはれなる身みの上うへとなりし也なり。

寡婦くわふは已すてに五十ごの坂さかも越こえたらん如ごとく老おゆ。一見けんして其愚直そのぐちよくなる、甚はなはだ氣きの毒どくなる人物じんぶつなることを知しらるべし。坂本家さかもとけが如何いかに寡婦くわふに取りて實家じつかなりといへ、兄あにの主人しゅじんに對たいし、殊ことに意地惡いちあしからざるに非あらざる家婦かふに對たいして、常つねに甚はなはだ氣兼きがねして住すめる様子やうすは、新しん參ざんの吾等われらが眼めにも、容易よういに看取かんしゆせられたり。寡婦くわふのみにあらず、此苦このくるしき忍耐にんたいは其娘そのむすめも亦分前またわりまへせり。十八九むとめの少女やさの優やさしき心情しんじやうも此浮世このうきよの悲かなしき運命うんめいの爲ためにや、何なんとなく已すてに畏縮いぢけて見みえたり。聞きけ。綿繰わたくる音おとの聞きこゆなり。此これ彼かの猶なほ稚いどひなき孤兒こじが、強しひられて採とる夜よなべの仕事しごとする也なり。不ふ思議しぎなるは此小兒このせうにが學校がくからにも

通はざる事なり。吾等兄弟始めより是れを疑ひぬ。

孤兒、學校に通はず、朝起くる毎に命せられて爲す事は、家の

周圍の掃除なり。朝なく小さき箒もて庭先をチユ／＼と掃く様

如何にも哀れに見ゆ。晝間は何事をなして日を送るか、吾未だよ

く知らずと雖も、僅に見たる處によれば、只うろ／＼と庭の内、

家の内なごうろつき居るもの、如し。時々家婦などより仕事命せ

られて爲す、其度毎に常に叱咤せらる、聲屢々吾等が耳に入りぬ

夜は多く綿繰を務め、十時を定めの時となし、鐘鳴るや、大に喜

びて、夜具に駈け込むが如し。吾等暫時にして此小兒の決して世

の常の者ならぬを知りたり。此舉動、其言語、凡て遲鈍にして少

しも少年の快氣なし。笑へごも未だ近隣を驚かす如くに轉げて笑はざるなり。泣く時は僅かに悲鳴するのみ。吾が井戸先きに顔洗ふ毎に他より注意を受けて頭を垂れ一禮すれども、注意を受けぬ時は決して禮を爲さず。吾が顔を打ち守りて眼をしばたゝくのみ微笑もせず、恥かしがりもせず。吾己に尋常ならぬを知りたりしなり。

哀れむ可し、此孤兒實に愚かなる子ならんとは。寡婦が心中果して如何ぞ、眞に哀れなる親子にてあるなり。

坂本の老人、語を續け吾に語るに次の事を以てす。

此可憐兒の上に兄あり、これ又愚にして殆んど處置に窮す。終

に或る寺院に送る、寺院其教へ難きを申し暫時にして送り還しぬ
 然るに今は養艱寺に在りて小僧となり、已に經文數卷習ひ得てや
 や元に勝るに至りたり。其上に猶ほ一兄ありき。此人は普通の兒
 なりき、されど不幸短命、今は在らず。

可憐兒さきに通學せしなり。されど他の小兒と共に學ぶ能はず

愚かにして何事も學ぶ能はず、終に止めぬ。爾來家にあり、何を
 教ふるも少も學ぶ事出來ず。強て學ばしむれば泣き出すのみ。若
 し他の小兒より打たる、時は平然として受け、忍び難きに至れば
 自ら又自分の頭を打て泣くに至る、若し叱責せられ甚だしきに及
 べば、己れ自ら己の手の甲を噛んで悲鳴す。實に憐れむべき生れ

つきなり、或は言ふ、猶ほ甚だ稚けなき時高所より人知れず墜落して氣を失ひたるに非ざる乎と。老人眞面目に此『或は言ふ』を語れども、吾は之を信せず。原因は他にあるべしと思ひたり。

此事情を語り終りて老人又あらためて言ひぬ。今や殆んど處置の法を知らず、恐る、此兒終に普通の成長を遂ぐる能はず終生獨立の生活を保つ能はず、愚に育ち愚に終る可きかを恐る。先生別に御工夫もなきものに候やと。

吾老人の心を察して甚だ氣の毒に思へども、實は甚だ答へに困りぬ。然れども亦自ら思ひぬ。此兒、愚は勿論相違なきも、自ら見たる處、老人より聞きたる處、處々の點より之を伺ふに、何

となく全くの愚者にもあらぬ様に思はれ、一種の原因あるありて
 心性發達を壓せらるゝにあらざるか、若し能く之を導き心性本來
 の微なる處より薬を投ずるならば或は意外の變化起らざるべきか
 吾かく思ひ、遂に試みに自分指導の任に當りて見んことを諾しぬ。

二十六日の夜は則ち日曜日の夜、吾可憐兒の教育を承諾したる
 夜なり。而して今は二十九日なり、二十七、二十八、及び今日と
 此三日を可憐兒に於ける觀察を略記すべし。

二十七日、寡婦なる可憐兒の母、事ありて二階に上りたる時、
 兒の教育を半ば恥ち半ば喜びて頼みぬ。吾只何事をも言はず、宜

しう御座ございますそののみ答こたへ置おきたり。

此朝このあさわ吾顔われかほ洗あらつて歸かへる時とき、可憐かれんじ兒已すでに庭先にはさきに例れいの如ごとく帚はらきと塵箕ちみどりとを携たづへて立たちぬ。吾われを見みて例れいの如ごとく默然もくぜんとして只ただだ瞬またきせり。其その時何事ときなにごとか問答もんたふしたれども忘わすれたり。手てに携たづふる處ところの齒磨粉はみがきのぶり、きくわんを示しめして其開閉そのあけどちの法はふを問とふ、しきりに眺ながめ、手てに取りてつまぐり居ゐたれども終つひに開ひらく能あたはず、吾之われこれを教をしへぬ。兒見じみて笑わらへり。朝あさまだき散歩さんぽせんとして二階かいを下くだれば、兒猶じなは庭先にはさきにありて帚はらきを弄もてあそび居ゐたり。強しひて伴どもなひ行ゆかんとすれども叱しからるゝと稱しょうして來きたらず。掃はかぬ時ときに叱しからると稱しょうし、吾等われらが捕とらへたる手てを振ふりきつて歸かへらんとす。收しうじ二内うちに入り許可きよかを得ぬて來きたるを見みて始はじめて安やすんじて

吾等われらと共に歩むあゆ。

此朝大このあさおほいしに霜しもふり田園でんえん眞白ましろなり。吾指われゆびさして問とふ、彼かの白しろき者何ものなにぞ

や。雪ゆきなりと答こたふ、否霜いなしもなりと教をしふれども雪ゆきなりと稱しよろして承知しやうちせ

ず。高等かうとうせうがくかう小學校がくかうの門前もんぜんに伴ともなひ、其石階そのせきかいを踏ふみ登のぼりて階數かゐすうを答こたへし

む。一ツ、二ツ、三ツ、四ツ、五ツ、六ツ、七ツ、八ツと數かぞへて

登のぼりぬ。吾問われとうて曰いはく幾段いくだんなりしや、十二じふになりと答こたへて平然へいぜんたり

否いな八ツにあらずや。自みづから八ツと數かぞへ乍ながら十二じふにと言いふは可笑をかしいへ

ども、彼少かれすこしも通つうせず。教をしへて曰いはく、高等かうとうせうがくかう小學校がくかうの石階せきかいは八ツな

り、記憶きおくせよ。と彼かれしばらくは八ツと答こたへて記憶きおくしたる如ごとくなり

しも、幾何いくばくもあらず問とへば已すでに忘わすれ了をばりぬ。

此日午後と記憶す。二階に登り來る。余が前に坐し、默然とし
て小さき手を疊につけ、茶色の頭髮をや、長く生したる頭をいと
恭しく手の甲の上に置きぬ。而して平然として坐し默然と吾を
眺め、口と眼とを妙に動かす。

以上の記は已に二十日前に記したる者に屬す。以來吾筆を投じ
て復書かざりしと雖も可憐兒は依然として可憐兒なり、然り彼は
其不運なる天稟と其不幸なる境遇との爲に益可憐の者となりつ
つあるなり。彼が悲鳴する聲、今二階の下に聞かる。嗚呼彼は何
事を泣くぞ。

吾が土曜日の夜

土曜日どいつびの夕暮ゆふぐれに來りぬ。連日れんじつ蕭々せうせうと降りつゞける春はるさめ、此日このひ猶なほ晴はれやらず、やまゝに漲みなぎる水蒸氣すゐじょうきのかなたより、濕しめやかに黄昏たそがれ來りぬ。

小説せうせつ『うきよの波なみ』を讀よみ了をはりて、暫時しばし頭かちをかへ眼めを閉とぢて哀想あいさうに耽ふけり居ゐたる余よは、室内しつないの暗くらくなりしにも氣付きづかざりしが弟おとうとなる人ひと、入いり來きたりて、燈とうつけまゐらせんと言いへりしに驚おどろき、振ふり返かへりみれば、幽闇いろうあん、寂寥せきれうの氣き何時いつの間まにか我わが書齋しょさいに充みち居ゐたり

けり。

『さて今日も亦た暮れしよ。否、吾自から點けん。』

『左様か』と答へて弟は直ちに出でゆきぬ。

されど余は猶ほ燈つけんともせず、がらす越しに、そどもの暮れゆく空に眼を放ちぬ。外面は流石に猶ほいと明るかりき。

『あゝ今日も暮れるか』余は再びつぶやきぬ。

かくて『うきよの波』中の一句を何心なく口のうちに繰返したる時、吾が心悲しき思にみたされぬ。見やる彼なたの峯の上を濃き雲の一團、やみと雨とをつゝみて、飄々と掠めゆく様ものすごし。又た寂しくも哀にも見ゆ。

『いかなれば此句は吾に斯く迄の哀を催さす事ぞ。』——おん僧、
 酒は年經たる匈牙利酒なり。嗚呼只だ此の句——さても氣の毒な
 るはエ、リヒよ。恐ろしきは、うきよの波にぞある。』

立て障子開き、欄干に凭りて、ひたすらに暮れゆく寂しき風物
 に眺め入りぬ。戸數四五百に足り足らぬ小市街を見下ろして遙か
 に、太平洋に續く日向灘を背おひて聳ゆる元越山に向ひたるは吾
 が書齋なり。

絲の如く降りそぐ雨に、薄青き煙をこめて、重く市街を覆ふ
 ものはなにぞ。

『夕暮の影か、寂寞そのものか、哀思そのものか、そも又た平和

と安眠と情話と戀歌とを和らぐる春の雨の魂か』なご思ひつゝいく。
 『さて浮世の波のおそろしさよ』余が思は再びエ、リヒの身の
 上の如何にも哀れなる物語のうちに入りぬ。筋太き手を、をりく
 獵刀のつかにかくる癖ある二十三才の若もの、「朝あまり早く出さ
 ぬやうにひかふる妻迎へむとはせずや」とセバルト和尚にいはれ
 て顔赤めたる彼、其の黒き瞳の稻妻のやうなる光、もしくは屋根
 の上をわたる淋しき風の音を聞ながら、離れたる浮世の夢の幻
 を描きつゝある彼。さながら生けるが如く吾が俤に立ちけり。

『さて哀れのものよ』余はつぶやきぬ。一滴の涙をのみぬ。

時に『清正公様』の信徒たちが打つ太鼓の音、雨に濕めりて重

く響ひびき來きたり、名なを知らぬ小鳥こどり、門前もんぜんの柳やなぎの絶頂せつちやうにとまりて、雨あめと
 夕ゆふべとを嬉うれれしげに聲こゑをたて、囀さへづり、二羽はの、これもわが知らぬ鳥どり
 もつる、様やうに並ならびて、上うへに下したに飛とびて山やまのかげにかくれ去さり、
 暫しばし時しして柳やなぎなる鳥どりも何いづれにか去さり、太鼓たいこの音おとのみぞ愈いよく々おほ重おもげに響ひび
 きける。市街しがい寂さびとして人ひとなきが如ごとし。水田すんでんになく蛙かはづ遠とほく又また近ちかし。
 忽たちまち想おもひ起おこせるは舊ふるき友ともの身みの上うへなり。忽たちまち想おもひ起おこせるは、阿あ
 蘇山そざんの美うつくしき煙けむりなり。忽たちまち思おもひ起おこせるは小兒せうにの時ときに嬉うれれしかりし
 事こと悲かなしかりし事ことなり。或あるひははてしなき時代じだいのすゑに、或あるひは限かぎり
 知しれたる吾身わがみ、命いのちの行末ゆくすゑ。彼かれより此これ、これより彼かれ、吾わが思おも
 ひは静しづかに、而しかもあとさきなき輪わの如ごとくめぐり／＼て、夕暮ゆふぐれの寂さび

しきうちに又また言いはれぬ樂たのしき心地こころを織おり出だし初はじめぬ。

はからずあ或ある旅館りよくわんの一室しつに出で遇あひ、不ふ思し議ぎにも十ねん年しん心かう交まじの交はり
 のごとく語かたり合あひたる人ひとの、一や夜やをかぎりに西にしと東ひがしとに別わかれて其そ
 のまゝ、互たがひに音おとさたなくなりし事ことなご想おもひ起おこしたる時ときは、ひたす
 ら人にんげん間の逢はうべつ別べつ遇ぐ離りの怪あやしき縁ゆゑんと、はかなき命めい運うんなご思おもひ續つけぬ。

『大野おほの太た一た、大野おほの太た一た、嗚呼あゝ此この人ひと今いま如ごと何なにになりしか、此この人ひと今いま何なに處ところ
 にあるか。』

十じゅう一いち年ねんの昔むかしに別わかれて、其その後ごはたえて一ひと度たび相あ遇あはあざる、十じゅう三さん才さい
 の時ときの同どう齡れいの同どう窓そうの友ともの事こと、突とつ然ぜん吾わが哀あい想さうの環わの一いつ端たんに現あらはれ來きた
 りぬ。

『彼れ將た、浮世の波にあらはれしか。』

『大島は彼の故郷なり、此島は布哇出稼の盛なる土地なるを思へば若しや彼れ群島の一はしに他の同胞と圓座して故郷戀しき歌唱ひ居らずとも言ひ難し。』

『左る事もあらざるべし。』

『然らば愈々うきよの波に浮沈して、今はいと淺ましき有様にもがきつゝあるか。』

『何ぞ知らん、嘗て彼の優しかりし紅の頬は、今は日にやけて薄黒く染まり、彼の丸く太りて柔かなりし手は、骨太き逞ましき腕と變はり、家には二十に足らぬ若き妻に、夕餉の煙を藁屋の頂

より吐かせて、それを谷の蔭より眺めつゝ、新月の光ふみて歸り
 來る若き農夫と生ひ立ちしやも。』

『嗚呼大野太一！』余は突然靜かに呼びけり。更らに思ひつゞけぬ。

『何故吾は彼の時、返書のはがきなりとも出さざりしか——何故
 又た、此友のみが多くの小兒時代の舊友の中にも、特別に想ひ出
 す事のしばゝくなるか、想ひ起す毎に愛慕の情と懷舊の情とに充
 たさるゝか。』

『それはかれの品性の美しかりしが故とぞ知らる。』
 かくて吾が俤のうちに一個の愛らしき少年立ちぬ。顔にあふ

る、無邪氣なる微笑のうちには誠にやさしき友愛の情をあらはす
 事、昔ながらの彼のまことの係なり。さて愈々明らかに此係
 を描かんと試みければ、十一年の記憶は已に臙ろにかすみて更ら
 に確かなる畫線を與へず、徒らに描かんとつとめて益々臙ろのう
 ちに消えゆくのみなりき。却て吾が想像しける彼は二十三四の屈
 強の若者とあらはれ、新月の光の下に、鋏を擔いで立ちけり。さ
 れど不思議にも彼の顔には無限の悲を包み居たりき。而して何
 となくエ、リヒと相似たる様に思はれたり。

『さなり、さなり、エ、リヒの幼時は太一の如くなりしならん、
 太一の如く、美しく、優しく、親切に、又かしく。』

『然らば大野太一の今の命運は又エ、リヒの如くなるかも。あゝ、うきよの波に洗はれしか。』

此時余は一首の古歌を想ひ出し、低き聲にてゆるやかに口ざみぬ。

せきとむる柵ぞなき涙川

如何に流るゝ浮身なるらん

二度三度此の歌をくり返して吟じぬ。おのれの聲の調子の悠々哀々の波にのせられて吾心も更に悲しくなりぬ。此時又エ、リヒを思ひ、而して大野太一を懐ひ、而して又た此歌を吟じけり。

頭を擧ぐれば、夜色已に全く市街、山野、田園を包みて、雨の

みぞ愈々降りそゞぎ、水田の水薄くひかり、暗黒のうちに又た、
 寺院の後ろに白壁おぼろにすかさされ、耳をそばだて、聽けば雨の
 音にまじりて老松の並木の馬場の方より遠瀬の如き響かすかに聞
 え、更らに耳をすませば、何處よりか小兒の泣く聲、聞えつ絶え
 つす。提燈一つ小路を横ぎりて忽ち又やみのうちにかくれぬ。

『嗚呼今日も愈暮れたるか。』

余は内に入り燈をつけ、机に向ひて靜かに紙をのべ、京なる友
 に書狀認め了はり、更らに父母のもとに一通認め、又た近來打
 たえて音づれなき友にも一通を書き、和歌など書きそへぬ。
 かくて夜の十時を過ぐる半。かくして吾が土曜日は過ぎぬ。

我が過去

我が過去は空想と罪惡と悲惨と失敗となりき。

クリストの教、其眞理、其生命を奉じて以來、已に數年を経過せり。此數年間は我が一生に取りて尤も謹慎を要すべきの歲月なりき。丁年上り二十五歳。而して我は此間に處して殆んど夢見る如き生命を送りぬ。クリスト教の眞理は我が精神の上は何の指導する處もなくして過ぎたり。

如何に屢々神を呼び、神に祈禱したるぞ。如何に多く泣き、多

く悶もがき、多く狂くるひたるぞ。カーライルを讀よみたるは二十歳さいの夏なつなりき。これぞ吾わが狂熱きやうねつの發端はつたんなりける。されどカーライル以前いぜんに於おて我われは實じつに盲目まうもくの聾つんぼなりしなり。

丁年ていねんの徵兵検査ちやうへいけんさを期きとして學生がくせいの早稻田わせだを去さり、獨學どくがくの麻郷まきやうに入いりて以來いらい、其その一年間ねんかんの月日つきひを我われは如何いかに經過けいぐわしたるぞ。一個この狂兒きやうじ、一個この夢ゆめの兒こならざりしか。此この時ときは我われ已までにクリスト教けうの信徒しんとの一人にんなりき。されど麻郷まきやうに在ありて我われ果はたして信徒しんとの嚴格げんかくなる體面たいめんと品行ひんかうと善事ぜんじとを完まつたか。麻郷まきやうに於おける、此我このわれ、果はたして眞面目まじめのものありしか。一言げんす、否いな。一個こ狂熱きやうねつのものに過すぎざりし也なり。

山と海と川と林と戀と、我が所有は之れなりし。箕山、高塔、千峰、岩城、琴石の諸山、麻里布の海、岸之下の海、八海川、麻郷村を暗く隠す松林、而して彼女と彼女と彼女と彼女と彼女。之れ即ち彼地に於ける我一年なり。

過去の我が生涯は、キリスト信徒として恥かしからぬ者なりしか如何なる點が、果して基督信徒らしかりしぞ。

第一、謙遜なりしか。太だ然らず、我は神の前に於ても、人の前に於ても、最も高慢なる者なりき。常に力足らざる企圖にその野心を焦したりき。神に捧ぐる事業の企圖を思はずして、世を驚かして自己の名を擧げ、利を占めんと欲望を充たす事に急なり

き。神かみのまへの謙遜けんそんなる者もの、いかで此かくの如ごときの行おこなひあらんや。若もし我わが過くわ去この生涯しやうがいのに如おほて謙遜けんそんならざりし實例じつれいを一々してき指摘きたし來きたれば殆ほとんど「高慢かうまん」其それ自身じしんは我がなりしと言いふを得う可べし。何故なにゆゑに我われは斯かく高慢かうまんなりしや。其理そのり由いうは明白かいはくなり、曰いはく全能せんのもうなる父ちちの神かみを愛あいし之これに近ちかづたてまつ奉まつり、以もつて赤兒せきじの如ごとく無我むがなる者ものとなる能またはざりしが故ゆゑなり。

第二だいに、自尊じそんありしか、否いな、我われは神かみのまへに高慢かうまんなりしが故ゆゑに却かへつて人ひとのまへには卑屈ひくつなりき。心靈しんれいの高貴かうきを神かみの御前みまへに確持かくじする能あたはずして多おほく人ひとに媚こびんことを欲ほつしたり。我われは信しんず、基督キリスト信徒しんとには神かみの愛あいと義ぎとのみに由よりて世よに立たつ、偉大ゐだいなる自尊じそんの念ねんなかる可べか

らす。之れ謙遜の徳と撞着するが如くなれど、然らず。高慢は主
 我なり。自尊は神と我との聖なる關係を尊び、世の前に屈せしめ
 ざることなり。言ひ換ふれば、我が心靈をして我慾望の前に屈せ
 しめざることなり。而して過去の我が生涯に於て最も缺く處あり
 しは此自尊なりき。故に我は餘りに多く人の盡力と好意とに依頼
 したり。嗚呼何ぞ夫れ卑屈の甚だしき。斯くの如くして我が心靈
 の光を暗くし、我が品性を壞りたり。我は神と偕に在りてふ信仰
 足らずして徒らに先輩の同情に訴へたり。嗚呼先輩何物ぞや。神
 の御前に於ては凡て同等ならずや。我は大なる神よりも小なる人
 を頼みて此高貴なる人生を歩まんとしたるなり。其は何故ぞ。理

由いさは明白めいはいくなり、曰いはく父ちちなる神かみの愛あいを信しんじ、ひたすらに之これを信しんじ以もつて我わが困難こんなんに當あたらざりしが故ゆゑなり。曰いはく、我わが心しん靈れいの高かう貴きを自じ覺かくすることの薄うすければなり。

第三だい、品行ひんかう嚴正げんせいなりしか。曰いはく、否いな。我われは惡あくてふ惡あくを行おこなはざりき。されど我われには嚴正げんせいなる品行ひんかうなかりしなり。我われは放縱ほうじようなりき。

基督キリスト教けう信しん者じやとしては如何いかに亂行らんぎやう多ちかりしよ。これ何故なにゆゑぞ。父ちちなる神かみの義ぎを實踐じつせんする事ことを以もつて、神かみを愛あいする所以ゆゑたることを確守かくしゆする能あたはざりしが故ゆゑなり。

第四だい、勤勉きんべんなりしか。曰いはく、否いな。我われは思おもふ基督キリスト教けう徒とは最もつとも勤勉きんべんならざるべからずと。基督キリストは人ひとにあくせくたれと教をしへざりき。さ

れど決して怠慢なれとは獎ざる也。神の義を行はんと欲せば日夜の勤勉を樂みて執り、以て自己を神の用に供へざる可からざる也。されど我過去は空想するに多くして勤勉するに少なかりき。

第五、常に祈禱せしか。曰く、否。我は祈らざるなり。密室の祈り、我にあることなし。我が苦悶する毎に、神に訴へざるに非ず、されど常に神に祈ることをせざりき。常に祈らず、故に、常に神に近からず。

第六、自由、平和なりしか。甚だ稀なり。我は決して不自由の兒ならざりき、されど我が自由は、神の宮にありてふ、幽玄にして快活なる信念より來る、眞面目なる自由にはあらず。名利の

一念、常に此世界を狭くし、此の心靈を亂だし、自由と平和と享有し得たる事、如何に少なかりしよ、失望も放棄も皆之れより生じたり。

第七、忍耐なりしか。甚だ然らず。我が過去の生涯に最も缺けたるものは忍耐なり。我は黙して艱難に忍ぶこと能はざりき。靜かに洗鍊に耐ふることも力めざりき。凡て神の御心にまかし、深く自己に省み、祈禱と謙遜とに由りて、困難に耐ふる事をもせざりき。叫びたり、悶きたり、咀ひたり、恨みたり、くらけたり。熱病患者の如くなりし。信仰堅實なる基督の信徒の如くならざりき。

第八、愛の心深かりしか。我は殘忍なる性に非ず。我父母は
 天性の善人にて在すなり。殊に我母は同情深きこと、普通の婦人
 以上なり。故に我も亦た同情の念、決して薄き方にあらずと自ら
 信ず。されど愛に廣大なる意義あり。同情は愛の心髓なれども、
 愛そのものには非ず。愛は没我なり。愛は道念なり。愛は實行な
 り。而して我が過去は極めて我儘なるものなりき。父母に對し、
 朋友に對し、妻に對し、弟に對し、同情の涙、幾度かそゝぎたれ
 ども、嚴正なる愛の道を實行することに於て甚だ乏しかりき。父
 母には我、不幸の子なりき。弟には我忠實を缺きたり。妻には溺
 れたり。朋友には薄かりき。教會を愛し、同胞を愛するよりも多

く己れを愛したり。否否、己れを愛することだにもせざりき。自愛の高貴なる意義は神と人とを愛することなり。されど我慾是れ主たる時に於て、眼中神なく、父母、朋友なし。

第九、基督を學ぶことをつとめしや。大に否。我が眼中、基督なし。基督の如何なるものなるか、我れ曾て究むることだにせざりき。基督無き神を望みたり。已に基督なし。何ぞ基督を學ぶことをせんや。

第十、聖書を研究したるか。否、否、我は聖書を一回だも通讀せざる也。聖書は我に何の力もなし。何ぞ研究といはんや。

嗚呼、基督なく聖書なく祈禱なきの基督教信徒、高慢、卑屈、

亂行、怠慢、薄弱、我儘の信徒。我は決して基督教信徒にあらざるなり。

然らば過去の我は何者なりしぞ。曰く空想の兒なりき。

A BLIND DREAMER! 夢想の兒なりき。自由を夢み、自然を

夢み、神秘を夢み、美妙を夢み、功業を夢み、詩人を夢み、戀愛を夢み、而して絶望を得たり。

麻郷に於て、柳井に於て、佐伯に於て、艦中に於て、北海道に於て、逗子に於て、東京に於て、カーライルを夢み、ウォールツウオースを夢み、バーンスを夢み、バイロンを夢み、今又西京に於て基督教信徒を夢まんとす。

夢想むさうと基督教キリストけうとは片時かたときも兩立りやうちりつせざる也なり。基督教キリストけうは人生じんせいの眞面目まじめなることを教をしふるもの。實行じつかうと苦闘くどうとは「眞面目まじめ」の保證ほしようなり。夢想むさうの妻つまは怠慢たいまんと安逸あんいなり。誇張こちやうと浮薄ふはくとは其そが媒妁ばいしやく人にんなり、虚きよ榮ゑいは其獨兒そのひとりこなり。

潔の半生

潔は當時二十三歳の壯年男子なり。父は官吏となりて東京に留
 り潔は四歳の時、母と俱に佐伯を出で父の膝下に往き、遂に今日
 まで全く都に育てられしなり。十三の時父に従うて或地方に住み
 しも其間は三年に足らざりき、三年に足らざりしも、此田舎の生
 活は彼に取りては限りなき幸とはなりぬ。
 潔は不幸にして十八歳の時、父を失ひ其翌年母も亦孤兒を遺し
 て逝きぬ。兩親を失うて後潔は全く孤立となりぬ。

潔きよしの祖母そぼあり。留とどまりて佐伯さへきにあり。東京とうきやうに來きたり住すむを嫌きらひて
 獨ひとりり、城山しろやまの麓ふもとに、其舊宅そのきやうたくを守まもり、一人ひとりの女をんなを使つかうて餘命よめいを樂たのみ
 居ゐたり。

潔きよしが身みうちと言いへば只ただ此祖母このそぼあるのみ。東都とうとには勿論もちろん一人と
 半身はんしんの血族けつぞくあるなし。佐伯さへきにも近ちかき親族しんぞくあらず、尺間山しゃくまやまの麓ふもと、床ゆか
 木ぎの村むらに三木みきと呼よぶ中農ちゆうのうの一族ぞくは今日こんにちまで最もつとも親したしく交まじはりし親しん
 族ぞくのたゞ一いなりしなり。祖母そぼを除のぞきては實じつに此一族このぞくのみぞ彼かれの親しん
 族ぞくと言いへば親族しんぞくなりしなり。

潔きよしはあまり學校がくからの教育けういくを受けざりき、只ただ三年中學校ねんちちがくからに學まなび一
 年半大學ねんはんたいがくに通かよひしのみ。佐伯さへきに移住いぢゆうすることを決けつせし一年前ねんまへ、已すて

に獨窓の下、二三の友を除きては甚だしく世より絶ち、獨り何事をか學びぬ。

祖母は其餘命を送る丈の資ありて潔の父母の死後と雖も、差支なかりしなり。

潔の父母は勤儉なりしかば、死後潔に相應の資をのこしぬ、潔全く自ら口を糊するに及ばざりき。之れ事實なり。

潔の天性は如何、これは茲に説かず、余が物語の進むに連て自から現れ來らん。されど一言すべし、彼は猛烈なり。情も強く意も亦強かり。

三、四年滞在の積りにて佐伯に歸りぬ。一つには祖母しきりに

其同住を望みしと一つには生地せいちの懐かしさに堪へざるとなりしなり。されど其重なる理由は、他に在り。彼は暫く田舎いなにありて靜しづかに其學を續けんと思ひしなり。

已にこれまで、佐伯と言ふ地名は潔が一種の想像に畫かれしなり。彼は四歳まで佐伯に在りとはいへ、全く忘れてしまひぬ。故に只だ父母より、時々噂を聞きしのみ、聞く度毎に懐かしく思ひ葉ほり根ほり聞き尋ねぬ。彼には已に一箇の佐伯の山河出來て居たるなり。

母は屢々故郷の事を語りぬ。城山、番匠川等の名は潔が耳に甚だしばく縲り返されぬ。母は折りく今一度故郷に歸りたき由

かこちしも、少さき官吏なりしかば女使ふ事もかなはず、さりど
て世話してくる、留守居もなく、かれこれ言ふうちに逝きぬ。潔
の心には此事甚だこたへ、益々佐伯に歸りて見たきの思を起せし
なり也。

潔が父母に伴はれ或彼地に、或は此地に、田舎の各地をめぐり
しは彼に少からぬ僥倖なりき。様々の山の景色、色々の水の流、
人情の異なる、風俗の變れる、潔は自ら大なる教を受けたり。
潔が少年の時最好めるは畫なりき、書籍よりも畫を好みぬ。
見る事よりも書く事を望みぬ。若し心に適ひたる小藪の繁み、花
草の束なぞ見る時は、筆とらずして止む能はざりき。此趣味によ

りて潔は甚だ自然の美に近づきしなり。

潔、始めは政治上に志ありしも、終に文學を以て世に立たん

と思ひ定めぬ。少年の頃は極めて文學の業をすかざりき。文學は

なまけもの、道樂仕事と思ひしなり。一度人情の幽音其猛烈なる

心の火の琴にひききそめしより、終に又政治上の功名を顧みざる

に至りぬ。

彼が好みて讀みしはカーライルとウォーヅオーズとエメルソン

と、聖經となりき。ミルトン、ユーゴーは、彼しばく讀みぬ。

潔一度己を天地永遠無窮の大自然の中に見出して以來又以前

の潔ならざりき。浮きもしたる彼の心、全く沈みぬ。只だ讀み、

只だ観只だ感じ、しか思ひ、光より暗に、暗より光に其思を駆りぬ。あめ、地、月、花、大空の星の影、地上の人と命、人の歴史すべて彼の心の上に異なる色、變れる形、新なる意味を運ぶに至りぬ。

潔、一種の趣味を持つなり。此は潔のみに限らぬ事ならん。

未だ住みし事なく、未だ見し事なき村落、未だ過ぎし事なき宿驛未だ住み慣れぬ市街、己れ等は潔にとりて一種の趣味を覚えしむ。潔若し山の谷の底にふと二、三十の家村を見出すならば、思はず涙浮べて感じぬ、何を感じるぞ、そはよく潔さへ知らざる也若し日傾きて足疲れし時、一つの宿驛近く來りぬる時、五月なら

ば五月鯉屋根の上に見えそめし時、小兒の群、何處も同じ小兒の
 群、街のはしに見えそめし時、不思議にも彼は他の世界より人間
 の世に降りしが如き感を焰し、胸とゝろかせ、心にあやしき喜
 を覚えて、珍しげにあたりを見廻すなり。而して其時、彼は最も
 よく人情を觀、自然を觀、人生を觀るが如し。此時見たる者は決
 して忘るゝ能はず、常に彼の心の底に岩清水の如くひそみ居て、
 時ありて涙と共に、靜かに流れ出づ。故に潔は甚だ新なる村、街
 住ひを好みぬ、而も、一度住みし處は常に彼れが故郷となりぬ。
 何となれば、彼は此一種の趣味をもちて住みければなり。

佐伯は潔が眞の故郷なり。父母の故郷なり。さなきだに彼には

大なるチャームなりし也。加へて此趣味あり。佐伯に歸るべしと
 心定めて彼の心は已に佐伯に馳せ、悲みとなり、喜びとなり、夢
 となり、まぼろしとなり、只だあけくれ佐伯のみ思ひぬ。

潔は佐伯に來りて、藤村夫婦を見出しぬ。木立村の岸に園田老
 翁を見出しぬ。臼坪村は彼のチャームなりき。多くの人間の出來
 事を感じぬ。歴史を讀み、傳記を讀み、詩を讀み、小説を讀み、
 此地上に於ける人間の運命に感じたる彼は凡て此等の出來事を甚
 だ敷強く感じ、人心、人性、人生等の深き想像を其上に燃しぬ。
 見る毎に、出遇ふ毎に、係はる度に痛く自ら感じ、思ひ、苦しむ
 又惑ひ、又悟り而して又毎に惑ひぬ。

佐伯の自然は潔甚だこれを愛しぬ。されどそは其佐伯なるが

故に非ず。只だ自然の美は佐伯に於て最も強く深く彼を動かしぬ

城山、元越峠、灘山、尺間山、彦岳凡て其美を彼に供へぬ。

潔が家を出で、左に折れ、養艱寺の門前を過ぎて。直に野分に

進む一路、右に溝あり、左は水田なり、此一路、達して窮る處は

家數も十四五に満たぬ蟹田と申す字。まだ其家々に及ばぬ處、一

座の森左に在りて、裡に社あり、前に石の烏井あり、石燈籠あり

大なる石橋溝にかゝり、溝は此邊に至りて甚だ廣く水を湛へ、潮

満つる時は小さき湖を形づくる。さて此一路は潔が好みてなす

散歩の筋なり。秋ならば紅葉溝の兩岸に並び枝と枝相接して溝を

掩おほひ、紅くれなる、水みづに映うつり、水みづ、蒼空さうくうと映ひじ、甚はなはだ美觀びくわんを備そなふ。人ひとの家いへに遠とほく、何なにかの默想もくさうを茲こゝ、あちら、こちらと行ゆき、して試こころむるに甚まなはだ適かなへる處ところなり。

此路このみちを左ひだりに別わかれて二條でうあり、一は静しづけき谷たにに導みちびき、一は小ちひさき一箇この村むらに導みちびく。村むらを白坪うすつはと呼よぶ。此路このみちより眺ながむる時ときは別べつに佐伯さへきより一世界せかいを別わかつて作つくるが如ごとし、山やまの麓ふもとにあり、村むらの背せは直たちに小ちひさき谷たになり。右みぎも山やま、左ひだりも山やま、前まへは水田すいでん、則すなはち此路このみちの左ひだりの田たなり。此路このみちを行ゆけば村人むらびとの聲こゑかすかに聞きゆ、子供こどもの呼よぶ聲こゑ明あかに聞きゆ。潔きよしと取とりて此こは種々しゆくの想像さうざう感めいの種たねなりし也なり。

生活せいくわつ、人間にんげんの地上ちじやうに於おける經過けいこう、其心そのこころ、其なさけ、其なみだ、

これらは潔が想像の目的なり。

潔が佐伯に留まりしは三年なりき。彼が最後の打撃は戀の失望なり。彼は半ば人生の問題に苦める際此打撃に遇ひ、たまり兼ね飄然として佐伯を去りぬ。彼は今猶ほ、村々、谷々、人情のある處、生活のある處、子供の聲の聞ゆる處、男女の衣の縫はるゝ處、森に斧の音響く處、市に荷馬のつながるゝ邊、累々たる墓地横はる處、泣き聲の聞かるゝ處、凡ての同胞の住む場所々々を彼は遍歴しつゝありとぞ。

一人の孤兒ありき。ふとしたる事にて潔と相知り、時々潔の家に遊び來る、潔よく之と語りて常にあはれがり待遇しぬ。此子が

親つやの身上みのうへを聞ききて潔きよしいたく感かんじたり。

一人ひとりの乞食こじきありて未いまだ年若としわかし、潔きよししばく之これに物ものを與あたへぬ。此この乞食こじきは馬鹿ばかなりしかば、少すこしも自みづから己おのれの位置ゐちを進すすめんとだに思おもはず。潔きよし甚はなはだ哀あはれの事ことに思おもひ、幾度いくたびか教をしへ遂つひにや、志こころざしある若者わかものとなし自じ分の家うちの庭掃にはらきとなしぬ。彼かれは忠實ちうじつなる僕はくとなりぬ。潔きよしは之これによりて甚はなはだ此世このよの人々ひとびとが其不運そのふなる同胞どうばうを所置しよちするの酷こくなるを感かんじたり。

潔きよしは何處いづこの渡守わたしもりとも親したしくなりぬ。女島をんなじまの渡守わたしもり、其他そのたあそこ、の渡守わたしもりが家族かぞくは皆潔みなきよしを知しりぬ。其初そのはじめには潔きよしがあまりしばく、逍遙せうせうして其度毎そのたびごとに物言ものいひかはし終つひに親したしくなりぬ。潔きよしは始はじめより親したし

くならんと思ひしなり。常に此生活の人々に同情ありしなり。

佐伯の町に面白き翁あり、いつしか潔の眼にとまりぬ。此翁の

甚だ貧しけれども、其おどけと勉強とにて、人に愛せられ生活を

すごしぬ。此翁甚だ面白き傳記を有す。

潔は同情深き男なりき。彼が同情の心の眼には、人間の意味甚

だ幽玄に映りぬ。彼は人々個々を重じ得たり。これ同情の心あれ

ばなりし。此同情の眼には、如何なる人にも、如何なる破屋にて

如何なる村にも市にも、悉く高尚にして意味深き、教ある、情あ

る物語を見出しぬ。

潔の隣家に一家族住めり、一人の母と三人の小兒と甚だ貧しく

送りけり。長女は十七歳、次女は十五歳、末は十二歳の男子なり
 き。母の人はあたかも五十の坂を越えたり。寡婦と孤兒等は八年
 前其夫たり父たる人を失ひぬ。今は養艱寺なる墓石已にや、黒く
 染りけれども、たよりなき此遺族は日に貧より貧に陥るのみにて
 母は精神的に半ば死にたるばかりなり。長女と次女とは人並なり
 しも、如何なる不運ぞ、末の小兒は全く愚鈍なりき。潔此家族と
 相知り、愚鈍の少年は潔に教へられ、導かれ、甚だ進歩したり、
 而し十三歳の春、忽然として逝きぬ。母は喪心して亦其跡を追ひ
 ぬ。今は此家族只だ二人の女を餘すのみ。

潔が見たる所何事ぞ。彼は只だ人を觀たるか、否天を觀たり、

只だ天を仰ぎたるか、否、人を觀たり。

不幸の家族、其情誼、不運の小兒其無心、或は無學の直剛の男
 或は無智の迷信なれども而も愛情に充つる母、白坪の老婦、陋巷
 の癡人、其幽思、其運命、潔は詳細に或は大體に之を觀之とか、
 はれり。而し多く感じ多く自ら苦しみ、自ら喜憂しぬ。

隣家の寡婦。潔に向て幾度か其不運と悲痛とを訴たり。潔之
 に向て常に言ひなぐさめぬ。

潔は愛の故に愛を視ざりき。善と言ひならされしが故にのみ善
 と思はざりき。惡とのみ惡まれ慣れし故にあながちに惡と思はざ
 りし也。彼の心はあまりに考究的なりき。淡泊に感動せずして、

表裏さまざまに考察して自ら苦悶しぬ。「様々の生活は過ぎぬ。様々の生活は來らん」單純なる言語なれども、幾度か潔は自ら唱へて、自ら遊び自ら感じぬ。

潔しばぐ言ひぬ、吾未だ世を樂しむに至る能はず、又世を捨つるに至る能はず。只だ調子卑き感情の境にさまよふのみと。

潔が家は城山の麓にあり。家の後は崖をなし、崖の上に藪しげる。

潔は日々の日記を作りぬ。出来る丈け詳細に書きつらぬぬ。其日記は潔のありのまゝの觀察なり、感情なり思想なり。ざんげもあり、虚榮もあり、空想もあり、潔の誇りもあり。恥辱もあり。

彼は只だ其日其日と書きつらぬたり。

隣家の寡婦に一男兒あり、斯くして彼を東京に送りぬ。蓋し、

彼等一家の者は此男兒が必ず立派なる官吏が教師となり、一家富有の生活に救ふべしと信じ居たりし也。男兒は病死せり。母は驚死せり、姉と弟とは全く貧賤に陥りぬ。

これは潔と呼ぶ人の日記なり、潔の此世を去りたるは二十七歳の春なりき。跡に一冊の日記残されぬ。則ち之なり。

此日記は潔が佐伯より歸る旅中より始まり佐伯を去る前夜を以て終る。佐伯を去て間もなく旅に病みて或る片田舎の怪しげなる旅宿の窓の下暗き雨を聞き乍ら逝きぬ。跡に一冊の筆記のこれり。

すなは此の日記なり。

すでに日記な、何とて世の所謂著述と比ぶべけん。筆の運も放

逸なり。記事も入り亂る。文字も撰ばず甚だ粗末の文章なり。

然る、自ら眞の文をなす所以は、ありのまゝの日記なればなり。

さすがに日記なり、支離滅裂のうち、自ら關係あり、聯絡あり、

照應あり、日より日、月より月、一個の潔の生ける生命は一貫し

て現はる。誌されし此事彼事、何の關係なきに似て、潔の眼と心

とを通じて自ら聯絡のありて存す。

潔は觀察者なり。物の一端をみて措く能はず。

或日の記

余よは此この日ひ吾家わがいへを出いで、はせの道みちより例れいの谷たにを越こえつゝ、道みちすがら

古來こらいの文學者ぶんがくしやし詩人しじん達の事ことを思おもひつゝいけぬ。彼等かれらは何なにを寫うつしたるか

何なにを教をしへたるか、元來ぐわんらい彼等いかれらは何者なにものぞや、彼等かれらも彼等かれらに寫うつされし人にん

間げん、及びおよ彼等かれらに教をしへらるゝ人間にんげんとの關係くわんけいは何なにぞやなご色々いろく思おもひつゝ續つづ

けぬ。彼等かれらがしばぐ苦くるみて或あるは世よを咀のろひ、しかも咀のろひし彼等かれらは

ぶく在あらずして、咀のろはれし世よは依然いぜんとして地ちの上うへに轉ころり行ゆくを思おも

ひ吾わも亦またはからず此世このよになげ出たされし事ことかななごひたすらに思おもひ

續つづけぬ。頭かしらと舉あげし時風ときかぜ一陣杉いちんすぎの暗くらきあたりを過すぎぬ。寂寥せきれうとし

て身みの周圍しうゐに山谷さんくの氣充きみちぬ。吾獨われひとり語かたりて謂いふ、ア、彼等かれら今は

何處いづこにあると、而しかして又また思おもひぬ、此坂このさかを越こしてさびしき足音あしおとをきゝ

し者もの幾いくたりぞ。哀あはれの少女をとめよ、さなり薪木たきぎ背負せふ哀あはれの少女をとめもありつらん。

或ある日の記き

吾われ已すでに屢しばしば々かん感かんずることあり、村落そんらくに入りて、或あるは土橋どばしを渡わり、或あるは柿樹かきのきの下もとに立たち、其處そこの農女のらぢよを見み、彼處かしこの老樵らうせうを見みる毎ごとに感かんずる事ことのあるなり。

自みづから思おもへらく、吾われと彼等かれらとの間あひだ、確たしかに何物なにものか挟はさまれ居をるを知しる、言いふに言いはれぬ隔離かくりを感かんず、此この隔離かくりは果はたして何物なにものならんぞ考かんがふれども益ゆきなし。たゞ一種しゆの感かんありて隔離かくりある如ごとく思おもはしむ。吾われは如何いかにもして此この隔離かくりを排はいし去さり、農家山屋のらかさんの人々ひとに接せつ近きんせまく

願ひぬ。肉體は近きたり、言語はかはされたり、されど猶大なる
 谷は吾等の間に挟まるゝ也。彼等は吾が住める世界の者に非ず、
 吾は彼等が呼吸する空氣になるゝ能はず。

言ひ換ふれば、吾自ら吾のまゝにして同時に村の若衆と全く等
 しき趣味、等しき感情、等しき思想を續くるを得ることこそ吾が
 願ひなり。

更に言ひ換ふれば、吾が眼にも彼の鎮守の森の映ることあだか
 も村の若衆の眼に映る如きを希ふなり。

されど到底出來難き事なり。則ち知る古より同情こまかなる
 詩人達が農夫野人を見て歌ひし詩も到底是れ詩人の感情にして、

たまく、農夫野人は其感情の寄托物となりしのみ、農夫野人の眞の生活は決して農夫野人ならぬ詩人に知らる可くもあらし。

老人、老嫗、少女、妻、貧人、富人、青年、壯年男子、農夫、商人、工匠、樵夫、船頭、孤兒、乞食。

正直者、馬鹿、奸忙、病人、戀愛の兒、善人。

潔が日記は決してあり得べからざる事實を記さず、普通あり得べき事も潔の眼と心に上りて自己の詩趣をなすのみ。

或日の記

夜は次第に更けぬ。ふたりの情は次第にこまかに親しみぬ。話
は自から哀れになりぬ。聲もをりく曇れり。其時は見かへして
は涙のみにき。

『潔さま』老女は言ひぬ。『とても早やわたくしの運はつきました』
しわがれし手の甲にて眼こそすりぬ。

此時窓の外さらくどさいめく如く雨ふりそめけり。

雨降りたる夜の冬の朝、風なくなまぬくき沈静の朝、白雲元越
山の谷をうづむ。

白坪村の朝煙しめりて高く上り得ず、後の谷にこんもりとたな

びき、黒く濕ふ藁屋より青き煙ゆるやかに上りて村の上を掩ふ。
 綿うつ弦の音例の如く聞ゆれども今朝はしめりてきこえ、彼處に
 一人、二人、彼處の堤の上を二人、三人、村人の行きかふを見る。
 老松の馬場の松が枝より墜つる雫は昨夜の雨のなごりなり。田
 のも、櫨の枝、をちこちの鳥勢なげに鳴く、さすがに冬の朝な
 り。

砂糖つくる場所に近けば、若者の小屋のうちに唱ふ聲聞ゆ。少
 女等の笑ふ聲聞ゆ、牛の鼻息聞ゆ。蟹田の鍛工の前を過ぐれば鐵
 槌の音已に朝の雲にひやく。

舊の十一月十五日は佐伯の祭なり、五所大明神の御祭なり、此

祭は佐伯にとりては甚だ注意すべき價値を有する材量なり。

此祭が關係する所意味する所は決して小少にあらず、試に思へ

如何に多くの家族が此祭の媒によりて平生の疎遠を癒し得るぞ

如何に多くの小兒たちが此祭の御陰によりて其心を新らしき樂

の轉じ以て言ふに言はれぬ平和の一生涯の最初の呼吸を呼吸し得

るぞ、數百年の古き社の森は相も變らず太鼓の響を重々しく反響

せしむるぞ。

人間が其社會的幸福を享有するに就て古も今も何處に至るも

御祭なる者の樂にする事如何に多きぞや、是を以ての故に余は

其祭を重するなり、其太鼓を聞けば色々の想像を馳せ行くなり。

冬の夜の静けき月の光は今しも風なき下界に満つるなり。子供
 だちの笑ふ聲が聞ゆるなり。彼等は明神の方に當りて響く太鼓に
 胸躍らせつゝ、馳せ行くなり、されど隣の彼の子供は行き能はぬな
 り、なさけなき事かな。

空は曇りけり、風は寒みぬ、冬の空の模様也。されど小兒の胸
 は春の日の晴れ渡る彌生に異らず。

是時に余は彼の病床を見舞ひぬ、彼は泣きなき語りて言ふ。

徳藏とくざうの墜落つゐらく

一郎いちろうと其妻そのつむとの自殺じざつ

大島尙三おほしましやうざうの運命うんめい、墜落つゐらく

少女等せうぢやうら老ゆらる勿なれ、吾われも老おいじ

三好みやうし 馬うまの小兒せうにに對たいする希望きぼう

倉くらの 落ち但たゞし其その一家かの不幸ふかう

入野虎之進いりのとらのしんの命運めいうん

横道家よこみちけの零落れいらくと最後さいごの不運ふうん

狂人きやうじんあり。其父そのちち之これを憂うれひ、之これを悲かなみて措おく能あたはず、彼かれは如何いかな

る道行きを經過して狂氣せしか。

彼は朝毎に菜園を散歩する彼の家の家妻を見たり、其背に小兒を載せ其顔に朝日の光を受け、其口に小唄を唱ふ。

彼は佐伯の歴史に熱中しぬ。彼は佐伯の近傍を歩みめぐれり。彼は戀に其心を專にせし事幾ヶ月、彼は

彼はふと此人の日々の生活に着目し始めたり、其甚だ萬變一律なるに驚きぬ。今日も、明日も彼はその注意を此人の外形の生活

の上に續けぬ。

城山の舊跡は潔に取り、少からぬ印象を與へ、想像を與へ感動を與へ、彼思を與へ、歴史を與へ、古と今と未來とに一貫する想像を與へ、東西興亡の歴史に於ける同情を與へぬ。

秋は城山の紅葉、谷間に、木間の燃え立ちたる炎の如く、朝夕に其美を專にす。冬は喬木の蔭、暗く、樹梢の風すごし。蔦葛、石垣にからみたる、灌木縦横に荊藤舊跡に満ち、苔、石に白く草は武士の夢の跡をなす。

眺むれば佐伯市街は目下に在り。川流蛇の如く、海洋遠く四國地を浮べ白帆處々に古も今も詩人の幽懷を刺撃す。

忽ち晴れ忽ち雪降る、佐伯近日の天氣也。白雲の大なる哉。蒼空の雲間に見ゆる更に美なる哉。

潔に愛友一人出來たり。此人潔より年若き事五歳、美しき少年なり。心あくまで勇々しく、情甚だすなほに、學も亦年にくらべて淺しといふ可からず。見識常の少年の上に出づること數十等されば潔と相見て相知りし以來、互に無二の友となりぬ。潔之を愛する事弟の如く、彼また親しむ事兄の如し。

少年思ひ立ちて都門留學を志して佐伯を出發するに至れり。潔もとより相談にあづかりたるなり。潔少年と別る、前數日は少

年の事のみ想ひやりぬ。愈々・港に送りて彼少年の姉妹達と歸り
 がけ、いたく天地命運の茫然として真による處なきを覺え、人間
 が其間に生滅して、苦勞經營し、或は會心の友とも別れ、吾は慈
 愛の母とも別れ、以て浮舟に生命を托す。嗚呼これ畢竟何の意ぞ
 誰か暴風の彼を海中に葬らざるを知らんや。誰か惡鬼の彼に急病
 を下すを知らんや。凡てはあやしき命運の手中に存す。しからば
 人間の此天地の間にかゝる、眞に頼る可きなしと云ふべし。否々
 神ぞまします。潔は熱涙をのみていのりぬ。勞苦經營豈空ならん
 や。哀別離苦豈悲しむに足らんや。東を望みて叫び、ア、好少年
 來るべき聖き運命を喜べ。進みてはげめく。

潔が少年を送りたる詞に曰く

爾、爾の立てる周邊を見よ。爾の生れたる時代を見よ。吾國民の位置を思へ。世界の歴史の指向を思へ。希望あるは吾國民なり人類の前途愈これより榮えん。爲すべき多く盡すべき多し。仰で皇天を忘るゝ勿れ。

旗本の老翁、甚だ奇人、奇なる者の尤も奇なるは、歴史に詳細なることなり。彼の歴史は軍記軍談の仕入なれど、人若し彼の辯吾形容を透して過去の歴史を顧る時は、日本の人民の過ぎ去りし生活の模様なご活きくと想像し得るなり。然るに彼れは正直温和に似て一種の剛直性を有す。

守錢奴強慾ば、彼と甚だ合はず、彼は常に貧窮になき零落になく。

彼潔に問うて曰く、如何なれば悪人は榮え、善人は苦しむか、人間の世界只だ此れに過ぎざるかと。潔此問に苦む。

潔佐伯にある數月、忽ち嘆じて曰く、嗚呼余も亦已に此周圍に化せられ了りぬ。嘗て感じたるチャーム今は感ずる能はず。吾も亦此等の人々と共に擾々の生活に入りぬ。

潔未だ友を得ず。老祖母に別る、介然として孤兒となる。戀人

と別る、天地の孤客となる。始めて靈魂の不朽と愛の永久を信ぜざるを得ざるに至りぬ、叫びて曰くア、子を失へる親よ。親を失へる子よ。妻を失へる夫よ。夫を失へる寡婦よ。爾等何に向つて満腔の悲哀を訴へんとはするぞ。死の暗室に向てか、はてしなき大空に向つてか。天地茫茫として答へず。爾等も亦漸く亡びんとす。爾等亡びて相率ゐて何處に之かんとするか、生きては無告絶望の鬼となり、死しては蛆と塵と空との餌食となるか。嗚呼死せる者豈死なんや。過ぎし者豈過ぎんや。

潔、書して曰く、ア、恐しき哉。見慣たる蒼穹漸く吾に驚愕の

情をみなぎらし來るを覺ゆ。深夜の星斗。

潔、曰、其理想にあくがれ、妄想に迷ひ、或は英雄といひ、或は事業と稱し、歴史と稱し、哲學と稱し、學者と稱し、進歩文明と稱する如き感念のみに形づくられたる世界に住む處の心を轉じて、無智と呼ばれたる、無學と呼ばれたる、生活の爲に生活すと嘲けられたる、故に思ひも付かれざりし農家の民の心持に自らなりて自ら反省し來り更に人間生活なるもの、愈々變妙不思議なるに驚きぬ。

辨當取りの小使の老翁、大聲に曰く、『年をとると釘がゆるんで

ゐますからなア。』

武二たけじは少年せうねんと共に茅屋ぼうおくをかりて住すみぬ。少年せうねんは貧家ひんかの生うまれにして

木立村こだちむらの産さんなり。武二たけじのもとにある六ヶ月げつにして死しす。此少年このせうねんは

武二たけじの無二むにの友ともなりし也なり。

姉あねをいかにせよといふ。

天地の秘密

何故なにゆゑにマルチンルーテルは其友アレキシスの雷死らいしに打れたる乎うた
 何故なにゆゑに西行法師さいぎやうほうしは其友の頓死どんしに悟りて身を捨てたるか。夫れ人ひとは
 皆死みなしを覺ゆるおぼるに似て實は然らず、滔々たる衆生しゆじやう悉く死を忘る、
 彼のマルチンの如き、西行の如き、實に其友の目前の頓死どんしにより
 て始めて死なる者の不可思議にして生なるもの、亦た不可思議な
 るを悟りし也。一方は無類の厭世家となり、一方は宗教大革命家
 となる。

何故なにゆゑに雷かみなりはルーテルに墜おちずしてアレキシスに落おちしか、ルーテルの足下そくかにアレキシスは倒たよる、アレキシス若もし生きて、ルーテル彼かれの足下そくかに死しせしならば、宗教革命しうけうかくめいは起おこらざりしか、鬼ども角かくも人間にんげんと天地宇宙てんちうちうとは不可思議ふかしぎなる命運めいろうん、人間にんげんの如何いかにともなすべからざる命運めいろうんの支配しはいあり、歴史れきしも傳記でんきも此中このなかより來きたるを免まぬれぬ事ことと言いふ可べし。

人ひと、天地てんちの秘密ひみつに感かんじ神會しんくわい、默契もくけいする者世間ものせけん少すくくと爲せんや、只之ただこれを明顯めいけんするの術じゆつに精通せいいつうせざるの多耳おほきのみ。其術そのじゆつに精通せいいつうして而しかも彼かの微び妙めう玄通げんつう爲なる者、之これを詩人しじんと言いふ、之これを預言者よげんしやといふ。

青年少壯の時代

少壯せうそうの時代じだいは最ももっとも比較ひかくす、夫それ只ただ妄想まうざうの比較ひかくをなす。

少年時代せうねんじだいの「妄想まうざう」一概がいに妄想まうざうと云いふ勿なかれ。何故なにゆゑに少年せうねんは忘想まうざう

にふけるや、否いな抑おさ忘想まうざうとは何ぞなんや老成人ちゆうせいじんには何故なにゆゑに妄想まうざうなきや

否いな果はたして妄想まうざうなきや。

人間にんげん生まれうまれて地ちに墜おつ、玉たまの如ごとく、星ほしの如ごとく、次第しだいに成長せいちやうする

につれて汚點をてんざん罪雲ざいうんむらがりて附着ふちやくす。之これ事實じじつなり然しかり事實じじつなり

然しかれども、何故なにゆゑに此かくの如ごときかを究きめよ、かゝる責せめは何なにに歸きす可べき。

「大業」とは如何なる時より發したる思想感情の言語なるか、人間が如何なる程度に迄發達し來りたる頃此觀念は生れしか。而して最も普通に此の觀念は如何なる性質を帯ぶるものなるか、ヴルテーヤが所謂人類の歴史は血の記録なる其歴史を有せり、吾等人間は如何なる意味感念を此の文字に有するか、大業——大業——大事業！これ實に少年時代の警句なりし。

忠ならずと欲すれば則ち孝ならず、孝ならずと欲すれば則ち忠ならず、之れ日本外史を始めて讀み習ひし時少年の單純なる感念を極めて強く動かしたるものなりき。余は平重盛の事蹟を讀ては幾度か單純潔清の心情を動したり、余外史を音讀して實に幾度

か泣きたり。

人が其の成長して後に後悔し煩悶する様を研究せんよりも、如何にして少年時代幼年時代に後悔煩悶の種を心中に播かれしかを研究せよ。

一群の男女が心を合せ聲を合せて神を讚美して歌ふを聞けり。
吾心をざりぬ。

少年時代を吾はかく養はれたり、吾はかく染められたり、吾はかく形造られたり、吾はかく侵されたり。然れどもア、然れども吾には笛を聞いて泣くの身を持ちラツバを聞いて躍り立つの耳を持ち、花を見月を仰いで恍然自失するの目を有したり。吾には猶ほ

天來の心靈全く死せざりしなり。

人間は場合より場合に移り行く盲蛇なり。人間の版圖は時を以て場所を以て制限せらるゝの外知りもつかざる制限を四方八方より受くる者なり。其の制限を看破して之れが桎梏を脱するもの、則ち場合より場合の流轉を免かれて能く己れの足場に永立するを得べし。

青年少壯の夢想の題目たる前途の樂。ア、前途の樂みとは如何なる樂みぞ、抑も亦た前途とは何ぞ！吾には前途なし、只だ今日あるのみ、只だ生命あるのみ、只だ心靈あるのみ、只だ心靈の幽音悲調あるのみ、只だ勞働力作あるのみ。

信仰と肉情

人類果して萬世永久を通じて一の目的に向て走るとせん乎、其の目的は何の目的ぞ、曰く問ふを止めよ、只だ此のまゝに安んせよと、吾人は屢々此の言を聞く。然れど、之れ終に失望の言たるに過ぎず、然らざれば今日までの「意義」「信仰」「倫理」をば瞑々の中に黙認せる也、猶ほ然らざれば、彼は酒を以て苦痛を忘るゝと等しく、只日々の習慣に盲目的に服従して終に思を該に及ぼすなく、頭を振り目を閉ぢて何をも視ず何をも云はざる也、其の確

然たる信仰の遂に視るべからざるは皆一也。

宇宙は無邊際なり、其の時間無窮、其の空間無限、人間生を此の中に保つ、空間と云ひ時間と云ふも、其の觀念たるに過ぎず。

花あり、光あり、波あり、蝶あり、告天子あり、蒼々の天あり

悠悠の地あり、寂々寥々あり、音樂あり、人間之れ通じて言ふ可

からざる觀念に入る、此れぞ宇宙の眞靈を冥合せるなり、死は只

だ肉の亡なり。生能く此の美、幽、眞なる觀念に入るを得ば、肉

を離るゝも亦た實に此觀念に冥合幽一するなり。

則ち信仰の人は此の死後の觀念に入る、生前此の觀念に入りし

度と肉情に入りし度に從て死後此の聖會に入るを得る度も自

ら異なる也。是に於てか、信仰の人と肉情の人との區別あり、進歩の意義も生くる也。

最高の技術は此の觀念に最も多く人を導くなり。

詩、然り、音樂然り、畫然り。

一個人の目的は之れに進むなり。

時代の目的は能く一個人を茲に入るを得しむる也。

則ち肉情の人は死後亦た暗黒に行く也。

吾れ、エマルソンの Man is his own star を唱し而してウオー
ルズウオースのインデペンデンスを讀み、而して夕暮に獨り寂寞

の境を漫歩して、天の蒼々として限りなきを仰ぎ、時の悠々とし
 て窮りなきを想ふ時は、人間心靈の獨立を感じ、齷齪として他の
 見聞を求むるの念を脱し、日月の永久を走る如く、吾が心靈も亦
 悠々獨歩して千萬窮りなき天地に住むを感じる也。ア、獨立なる
 哉、自由なる哉、悠々たる天地なる哉。

唯皮相のみ

余朋友と語るに、余が沈思冥想し、讀書し、感激して得たる思想を語れば、友は常に、然りく、實に然りと答ふ、其の様、誠に能く余の意味消息を解し居る者の如し。然れども實は彼等多くは余が眞意を解したるに非らずして、ありふれたる言葉に現はれしありふれたる思想を以て余の幾多の經驗、幾多の沈思、幾多の煩悶によりて得たる思想と同一視せるなり。余は是に於て悟り得たり。余が彼の大詩人、大預言者達の文字を讀んで解し得たりと

なす事も、彼れ大詩人、大預言者達より視れば、實に皮相を撫せ
るものに過ぎずして、神會靈悟に至りては容易に到り難き者なる
事を知り得たり。

信 仰

信しんずる事こと、信しんぜざる事ことてふ區別くべつよりも人間にんげんは大だいなり。されど不ふ思議しぎにも大だいなる人間程にんげんほど愈いよく々かた堅かたき信仰しんかうを有いうす。

書籍しよせきの知識ちしきより冷ひやかに組くみ立たつる信仰しんかうは要やうするにやむを得ねざる信仰しんかうなり。信仰しんかうの光ひかり、心こころに燃もゆる、すべからく、春雨しゆんうの融とくるが如ごとく已すでに自みづから知しらず、欺あざむいて自みづから知しらず、故ゆゑに孜し一日じつも安やすんぜざるなり。力つとめて眞境しんきやうに到いたらんとす、此この熱心ねつしんは必かならず酬むくいらるゝなり。

故ゆゑに眞人しんじん能よく神韻しんゐん縹渺へうべうの自然しぜんの境さかひに到著たうちやくしてあらゆるミステリー
 を抱懷エンブレースして、惑まどはず。ゲーテが所謂いはゆる Mysterious all, yet all is good
 の大信仰だいしんかう之これなり。余よみづか自みづからかくは推論すゐろん直覺ちやくかくし能あたふと雖いへども、只ただだ之こ
 れ思想しさをに過すぎざるのみ。心耳しんじを傾かたむけて雄大高壯ゆうだいかうさうの天籟てんらいを聽きく、未いま
 だまことに此境このきやうに到いたる能あたはざるを恥はづ。

氣附く事

君よ君自ら吾は此不思議の世界に生れ出でたる人間なる哉と氣附きし事ある乎。

再び言ふ可し、氣附きし事ある乎。君、余の此言を以て奇怪となす勿れ。君若し眞にかく氣附きし事だにあらば、然りくと手を拍たん。氣附くなり。知るにあらざるなり。思ふにあらざる、感ずるにあらざるなり。語あり。『吾今にして始めて知りぬ』云々と彼豈に初めて知りたるならんや、始めて氣附きしなり。則ち眞

に知らざる也。なり

君人生を解説せんと欲するか。宇宙の眞理を知らんと希ふか
果して然らば先づ『吾は此宇宙に生れたる人間にてありし乎』と
氣附く事に力められよ。氣附く事に、然り氣附く事に。

君にして始めて之れに氣附かばカーライルの所謂『シンシリテ
イ』なる者則ちルーテルの本色、ゲーテの本色、ダンテの本色、
期せずして悟入せらる可し、エマルソンが所謂天才は宗教的なり
どの言も直ちに明に悟るを得ん。

無題錄

◎人間の理想が實際より誠に遠く深きを感じると共に人間の暗所
悪毒の又た極めて深く且つ遠く、其の底其の形の容易に發見徹視
し難きを感じずるなり。

◎ア、マホメットの劔、クリストの血、吾れ其の内に今日迄で
聞かざりし他の雄大悲壯の叫を聞く、則ち彼等は、信仰理想の敵
に向ては一步もかさゝりし也。

◎青年少壯は盲力なり。 blind force.

◎ 悲は恕に非ず、哀は咀に非ず、悠々たる天地、忡々たる哀思、
 本然の至情は此境に湧き、無限の聖愛は此の時に動く。

◎ ウオルズウオースも泣きクリストも泣く。健猛剛毅の意志と凄
 凄忡々の哀思は決して撞着せず。

◎ 何故に爾は爾の家業を務むるや、爾の希望は如何、爾の快樂は
 如何、爾の人生は如何と田舎の農夫に問へよ、農夫答へざるべし。
 笑て夫の太陽、山、川、野の花、藪の鳥、河邊の羊、妻と子を指
 して曰く「君彼等に向て聞け、余の爲めに答へん」と此中にはポエ
 チカル、ツリユースあり。

◎ 余は、余の殘刻なる哲學を以て吾が同胞の笑を打消し、哀を嘲

り勞働を罵るに忍びず。

◎余は寧ろ彼等の笑ひ、彼の哀み、勞働の中より爾の哲學を見出さん事を望む。

◎比較は説言に必要な法なり、何となれば人は比較によりて知る事尤も多ければなり、讀書は比較の一なり、故に吾が感得し悟入せる眞理眞美と雖も之れを現はすには比較法を用ひざるべからず。

◎嗚呼吾は死せる人を見るより、苔蒸す墳墓を見るより、老いたる人を見るを悲しむ、如何なれば、老いねばならぬ人の命運なるか。而して、此命運を嘆きし人幾人かある、ア、老衰の人、何の

望のぞみ何なにの樂たのしみかある、山やまをも動うごかせし意氣いき今いま何處いづこぞ。

◎旅行りょこうは真まに社しゃ會かい生せい活かつのベライチーベライチーをみ見るを得ねん、且かつつ自みづから之こ

れ悠々いろう／＼行路かうろの人ひとなるが故ゆゑに「人じん生せい」をかんが考かんがふるに大おほいに深幽しんいうなるを感かん

す。

悪魔

天地生れて幾何日の後、直に億萬虚空の畦を彷徨ふものあり、
 彼は荒野に放たれたる咀と死とが産める子なり、天の赤き星、紫
 の星、青き星、緑の星、燦然として、彼が上部半身を鱗の如く飾
 り、地の諸々の芽む物、諸々の遊ぶ物、諸々の舞ふ物、諸々の動
 く物の呼吸せる息、飄然として彼が下部半身を裳の如く纏ふ、彼
 は常に甘露滴る紅濃き兩唇の間より、黄色なる眞珠の舌をべ口
 リくと弄しつゝ、此所彼所を辿り廻る。

生物の魂の腐れに浮べる蛆の子、暗黒の焰の臭ひに住める蝮
 の子、都ての耻の子、都ての智の子、都ての憂の子、都ての恨の
 子、及び都ての淫の子等は、彼を萬軍の主と讃へて、虚空の始め
 なき始めより、虚空の終りなき終に迄、其主の到る所にぞろぞろ
 と這ひ廻る。

彼は三千世界ありとあらゆる甘味の露を蒐めて、錬合せたる蜜
 汁の塊を彼の黄色なる舌に載せ、到る所神の兒に接吻を試みん
 とすると屢なり、神の第一の兒は彼の黄色なる舌に接吻して、耻
 の子の手、智の子の手に擒られ、神の園より離れて、遂に咀と死
 の手に抑へられ、塵土の如き不自由と、塵土さへ受けざる苦勞と

を受く、その幾何億兆の子々孫々は、亦た咀と死の手に艱み苦め
 り、彼は神の兒等を咀と死の手に渡すも未だ尙ほ此に止まらず、
 或は地獄の豕の汚れたる腸を取り來りて神の兒等に食はせ、以て
 その魂を爛らし、或は死蔭の犬の腐りたる血を酌み來りて神の
 兒等に飲ませ、以てその心を濁らす。而も彼は傍ら麗響美音玻璃
 板上珠玉を轉するが如きの聲を發して神を讚美するなり、禍な
 るかな、神の兒等は彼が爲めに、その魂を爛らせ、その心を濁
 らせながら、神を忘れて寧ろ其聲を讚美するなり、彼は未だ尙ほ
 此に止らざるなり、彼は神と神の兒とを離間して、神をその兒の
 爲めに怒らしめ、兒をして父なる神を恨ましめ、その神の怒と、

その兒の恨を以て、彼は無上の食物となすなり。

彼は此の食物を貪らんが爲め、三千世界中の一隅をも這ひ廻らざる所なし、彼は怒の洞を削りて血の流を啜り、彼は恨の股を裂きて肉の塊を喰ふ、幾百萬斗の血流を以てするも、何千億斤の肉塊を以てするも、中々彼が腹を満たす能はず、何となれば彼の青黒き腹は無極も容る能はざる、惡念惡執の大物を呑んで尙ほ餘りある量あればなり、彼は未だ尙ほ此に止まらざるなり、彼は自から神の兒の保姆となる、禍なるかな、神の兒亦た能く彼に懐く深山の森を行きて猛獸の口を遁るゝことあるも、激戦の野に立ちて劒槍の手を遁るゝことあるも、自から保姆となり來る彼の手を

遁るゝこと決して能はず、彼の手を遁るゝ能はざれば、彼が黄色
 なる舌の接吻を遁るゝ能はず、彼が勸むる罪の水と惡の水とを混
 じたる汁を遁るゝ能はず、此に至りて、神の兒は、彼の奴隸と成
 り了る、而も彼は神の前に立ちては、諸々の神の兒等の如くに神
 を褒め讃へ、竊かに血の糊せる雙齧の邊を清む、彼は未だ此に止
 まらざるなり。彼は神の前に天使の如く見せかくるも、神の背後
 に隠れては例の黄色なる舌を、ペロリ／＼と弄しつゝ、飽なきの企
 てをなす、彼は善の子、美の子、眞の子等を神の手より奪ひ、そ
 の既に彼の手の下に奴隸となせる神の兒等と共に、都て生ける火
 焰の大籠中に投せんとするに在り。未だ此に止まらず、天を亡し

地ちを滅はろけし、天地てんちの靈魂れいこん及び天地てんちのありとあらゆる靈魂れいこんを殺ころさんと
 するに在あり。未いまだ此これに止とどまらず、あらゆる萬物ばんりつの主しゆなる神かみの勢力せいりよく
 を無なみし、神かみなる上帝じやうていをも無なみし、此この都すべてを無なみする彼かれ自身じしんを
 も滅亡めつぱうせんとするに在あり。彼かれは此この企圖きとを成就じやうじゆする迄までは億萬無極おくまんむきよく
 に存在そんざいし、彼かれが存在そんざいする間あひだは億萬無極おくまんむきよくに其企圖そのきとを止とどめず。彼かれは惡あく
 魔ま也なり。

死は滅なるか

天てんの限りなきを觀み、時ときの窮きはみなきを想おもひ、靈れいの永えい久きうを信しんじ、神しん
靈れいの宇う宙ちうを感かんずると云いふ人ひとが、此この後を二十ねん年ねん三十ねん年ねん四十ねん年ねん五十ねん年ねんの事じ業げふ
空くう想さうを果はてしなき將しやう來らいの如ごとくに感かんずるこゝを眞しんに不ふ可か思し議ぎなること
なれ。嗚あ呼い然しからば死しは滅めつなるか。

プ ラ イ ド

其れそぐの種しゆるる類ひとの人ひとには其れそぐのプひとライそのなかドあり、人ひとは其中そのなかに生いく。其そプひとライそのなかドの種しゆるる類ひと性せい質しつを看かん破ぱする時ときは、以もつて人じん情じやうの變へん、及および社しゃ會くわい組しき織よに由よりて、人にん間げんの道だう徳とく品ひん性せいの異ことり行ゆくを知しるに足たらん。

カちーラちイル、ウオズウオちース等ちにはカちーラちイル、ウオズウオちースのプひとライそのなかドあり、其その他た理り想さう的てきの人ひとには實じつに理り想さうのプひとライそのなかドあり。然しかれこも乞こ食じきには乞こ食じきのプひとライそのなかドあり、江え戸どツ子こには江え戸どツ子このプひとライそのなかドあり、又また政せい治ち家かには政せい治ち家かのプひとライそのなかドあり、詩し人じん

哲人てつじんには詩人しじん哲人てつじんのプライドあり、寒村かんそん漁浦ぎよほの民たみにはそれ相應さうおうのプライドあり。

通觀つうくわんし來る時ときは、實じつに感深かんふかからざる能あたはざる也なり。桃もも花はな流なが水みづ突つ然ぜん去い別べつ有あ天てん地ち非ひ人じん間かん。之これ李り太たい白はくのプライドなりき。余よは教けう師しを以もつて目めせられん事ことを欲ほつす、然しからずんば空くうに！、之これウオーズウオーズのプライドなりき。哲てつ學がく者しやは尤もつも神かみに近ちかし、之これ亦またプライドに非あらずや。

人にん間げんが人にん間げんたるプライドを失うしひたる時ときに於おいて、無む限げんの幽い愁しう煩はん悶もんに陥おちる、否いな言い換ひかれば天てん地ち不ふ思し議ぎの秘ひ密みつが渠かのかれれのプライドを挫くじきたる時ときに於おいて然しかり。

此のプライドより、彼のプライドに移りゆく者なり。然る時は人は變化したるなり。たとへば金森通倫の以前のプライドは一僧侶なりしなるべし、今のプライドは政治家なり。

故に人は多く自ら顧みて其變化の果して進歩なるや退歩なるや墮落なりや否やを判ずるの力を失ふ也。何となれば、彼は徹頭徹尾プライドなれば也。

少年時代のプライドを名けて老成人は空想と稱し、之を卑む。實は其人の少年時代も斯くありしなり、而して老成人を以て卑屈とか小成に安んずるとか罵りしなり。人はかく變化するなり、プライドの變化したるなり。其の變化は正しく言はゞ、果して進歩

的變化なるか、客觀的に言はゞ果して進歩的なるか。

已にプライドなり、此の種のプライドと、彼の種のプライドと相衝突する時は、則ち茲に冷笑起る。冷笑の起原は、プライドの衝突なり。

朋友其のプライドを異にする時は、親情容易に起るべき者にあらす、類を以て集るとは、多くはプライドの類を以て集まる也。

人の前に謙遜の如く見ゆる人には、隠れたる處に其の根強きプライドを有す。プライドする處を明白に之に示す者は、要するに洒落の人なり。プライドする處を奥深く秘して仍且つ傲然たる人は陰險の人なり。恐ろしき男也。

世には己のプライドとなす處を明白に認め得られぬ者もあり。

非常に強く認むる者もあり。

然れども人は己のプライドとする處を現はさざる能はず、多く

の人は勉めて現はさん事を欲し、或人は現はさぬ事を勉めて其の

實現はす事を計るあり。

人はプライドに生く。これ人を輕蔑して言ふにあらず、只だ事

實を言ふなり。此の事實を能く認むる者はプライドの變化により

て己れの本領の變化に氣附かぬが如き滔々たる弊に陥ること稀な

るが如し。

人生の奥妙

人は狎れる動物なり。狎れては富士も琵琶湖も其美を美とする
 能はず。富士は何時までも美なり、琵琶湖は何時迄も美なり。さ
 れど人の心は遂に之れに感ぜざるに至るが常なり。かくの如く人
 は宇宙、人生の疑問に對して始めは熱烈に感じ、奥妙は奥妙を生
 み、その心自ら高遠幽玄の調を發するも、年齒と共に之等の人
 生にも宇宙にも狎れ來るや、赤條々の心を以て人生、宇宙、生、
 死等の奥妙に對せし意氣、何時とはなしに消え去ることを免がれ

す。所詮人は狎れる動物なれば也。戒む可き哉。宇宙は何時まで
も奥妙なり。人生の靈妙幽音は萬古に變らず。

獨歩小品終

明治四十五年五月十四日印刷
明治四十五年五月十八日發行

(定價金參拾錢)

不許複製

編輯者 國木田治子

發行者 佐藤義亮

印刷者 中村正雄

東京麴町區飯田町
三丁目二十五番地

東京市麴町區有樂
町二丁目一番地

發行所

東京麴町區飯田町
三丁目二十五番地

新潮社

電話「番町」三、二二三番
振替「東京」一、七四二番

(報文社印刷所)

▼熱情の人國木田獨歩の眞面目を看よ▲

獨歩書簡

賣切又賣切

八版印刷出來

▼定價 金六拾錢
▲郵送料 金六錢

◎書簡は眞摯なる自傳也。胸臆を拓いて何の掩ふところなく之を對者に慫ふ。不用意の間に偽らざる人格を看ることを得べし。殊に況んや熱情の人獨歩に至りては、其書簡悉く眞面目に自己を語るもののみ也。戀愛、藝術、人生等に關する彼の苦闘史を露骨に端的に説明するものは即ち其書簡也。

◎文壇、交友に富めること獨歩の如きはなく、常に其動靜感想を交友に報するを怠らざりし者、亦獨歩の如きは鮮し。本書收むる所、明治二十四年の學校時代に始まり、四十一年の病院時代に終り、佐々木某女史に寄せて、熱烈火の如き戀を語れるものは勿論、各方面の知友に與へたる書簡、集め得べき限りを集めて、以て文豪赤裸々の面目を示す。

◎生ける書簡文の範を得んとする人に向つて、亦本書の必讀を勸む。獨歩の文章既に定評あり、而して書簡に至りては何人も、其妙を争ふ可からず、區々の片簡と雖も、皆珠の如く瑣々誦す可し。乞ふ就いて暖き血液の通へる生ける書簡文範を見よ。

PL810.U5 A6 1912

Kunikida, Doppo, 1871 – 1908.

Doppo shohin

39090014794065

7
1
1
0

Gift of Professor Andrew McClellan

From the library of

Edwin McClellan

1925-2009

Scholar and translator of Japanese literature



TISCH LIBRARY AT TUFTS UNIVERSITY

